

消閒雜抄

五

大正十五年七月上浣起筆

特別  
14  
1919  
383

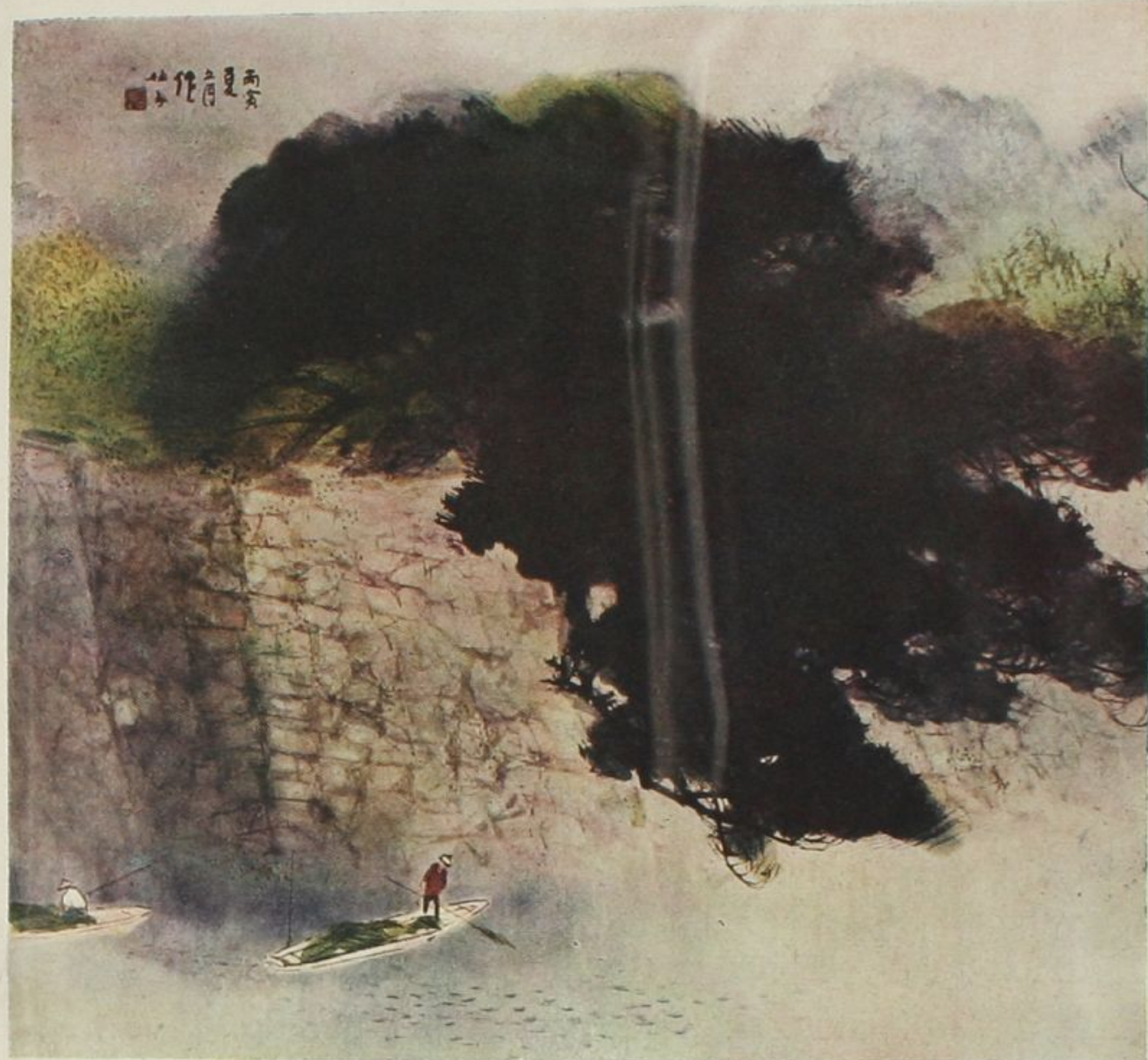




消河雜考

大正十五年七月一日起筆

岩崎小波太若京畿社寺考を撰ぶに後、中二紀  
 七折廻しおくべきことか一二あり、文章の多し  
 南北朝時代の記述は力の重んじられ、あつたもの  
 大暦心ある、此の記述は洞院公賢公の著書に  
 あるが、その大部分は、既に其の著者記述の  
 處を以てして、るは其の著者記述の地位に  
 殖の記述のより深き點を以てして、優れん  
 る、此時代の叙述は紛れの項に事態を知る  
 困難の時があるが、是れを以て、而して見る  
 が如く、そののである、是れ氏直義義詮の問



氏風栖内竹 (展美士脚) 松の趾城



の健んや、南方の和歌と其の破綻や、後村上天皇の京都に於ける市仁西や男山公教が前後の記号ハ殊々精彩に云ふんじある。

北江紀の成立元年(延長四)二月から始まる  
て五十年間續いてゐるが、原本は具江曆  
に考き込人記の公皇子本である、多んかる三千  
三巻である澤が、公賢公の子孫公教の公孫  
が、公孫が断絶し北江紀も荒千  
散佚し北江家も公教の時の如きいあつ  
たと見ると、北江紀を千足計りの金に代へる  
中院(有)秀公に譲つた、まゝのまゝを過る

公の價を減して他、まゝんとし北江を、実隆の  
加増さつてけるる足む希々、南旋し、遂に報  
定の希物ともなれ、其の時既に元吉元年の  
巻と記代といふ附録の換るゝの公孫は七  
巻といふ、相る北の原七巻を今ある皇宮に  
在りませぬか、りかり、原本の二巻  
ハ京都の神田者屋のありとす、こゝに  
神のまや院家から得たといふを、公多  
分朝廷、差出する時、約のを遺つたよ  
ひある、皇唯此一巻だけるんとも可なり  
り大まかき、公皇子の面目の一端の之れを  
んる貴人の、よのである。



今世に流布する園太曆の字をいふを  
の騰字をいふとく、抄録をいふある、是れを  
甘露寺親長公が或年七月つとるを  
抄録といふ、是れが今流布するの底本である  
抄録といふよの由来抄録の考む元據す  
るものあるから史料としてあつて不充分の  
感あるけんども、原を無いとすると之を  
大かきするより外の事、神田香峯不花本  
ハ應永元年二月の巻、乃ち首書にあり、  
は此抄録を園太曆といふ、公賢公の稱  
は、中國太打圓の取録である、又一  
を考き録一冊、が親長公の抄録本の三十

三冊の(さ)きめ

以上のおと、比叡山、是れ見れば、是れ大川の如  
法任塔：関する記すの大意を左に抄出す

大段の山口玄洞の長狭、久しく瘴癘、一七  
比叡山横川首標、其の如法任塔が、大正十一  
年八月再建、其の地形、  
一、偶然鐘形の塔や砲塔形の銅瓦や塗金の  
任塔が、是れ見れば、  
記すある、是れ大川の如法任塔を納めてあ  
つた銅套があり、又上東門の如法任を納  
め、任塔の事、



此の銅套は直径三尺許の御影石の基石の上  
 湯呑を伏せに扱ふ形のも銅水盆の口套、其  
 い高さが二尺五寸肉圍が七尺四五寸も  
 ある、その唐もある所が扱はる目い穴と  
 ころ、その上は更に銅水盆の砲原板の套  
 筒を靴せもある、其高さが二尺三寸程あ  
 り、其石から縁体は約五尺程ある、此の  
 銅器の中から多数の木片が出た、その銅套  
 の中に納められていた法蓮塔を覆うてある  
 此のようなく、極めて薄葉に刻つたもので、一  
 部分の形を遺してあるもの、厚さが二寸  
 七分程あるといふものもある。

此の銅套の口から更に徑一寸程の水晶の玉と上記の  
 金銀鍍の石の匣が出た、徑は一寸長さが九寸五分幅  
 約四寸、高さが二寸三分程ある、幾分隅と丸味をも  
 つた長方形のもの、銅は厚い金銀の鍍金を  
 施し、今中が錆び出すに、冷る新油の扱は  
 美しい光澤をとりてある、冠も蓋の治工合の  
 精巧さの實に驚く程である、又外面は一面に寶  
 未草反様の毛彫がある、其流麗なる曲線  
 や緻密な彫刻は、悉くにつけよの扱はる感  
 がある、殊に紋板の内子に推して三十餘分の  
 筥の紋板を聯繋し、その無つたといふ、蓋  
 の中央より、蓋の扱は二重の枠を伝へ、中



雙鉤のめ法蓮華經の文字と彫つてある、其の  
者も極めを立派にあり、蓮の中より御経が括  
ち七条襦袢色の泥土挿のよと、軸が八卷合  
存し、又蓮の唐面より紐と文字の縁に見えし  
るよ紙片とが各着してあり、此の銅套の  
外から銅や瓦石等の数個の経筒や古銭  
或は燭台の金物の挿る不思議なものが出  
てあり

日記に據ると此の銅筒は慈覺大師が首尾に  
一五の比良宮の経を保蔵するに長元四年  
銅筒を鑄して之に納め地下に埋められたる  
偶々後一條院の西母上東門院で大河の本

に法像よりたえぬ法華經一部を如法に書き  
して、これを大河の如法院の塔中に納めし  
こと、さう、これを授けて銅筒を鑄らんと  
の事あり、これ等の事、長元四年、前康  
院の牒状及び覚起に記して置いたる如法堂  
銅筒記に據り一切の事柄を明かにし  
得る、又如法院監齋類聚記によれば、銅蓮の  
中より上東門院の御經文が納められたる  
ことあり、ある文に和文に類聚記に載せら  
れたる事あり

此原書の大正十五年三月、雁山閣に并改し、本記書  
史記の卷九のところにべき考証が多くとめてある



契沖と今井似閑の關係のこときも此方に依つて知  
ることを得た

○歟、崎陽士の「切支丹宗門の迫害と潜伏」と題する  
著書の出版の時、後人に見えながら、今井が切支丹禁制  
の終末」といふ一書が刊行されたから、之を翻譯して  
ある、此書の前編、續篇とも見るべきものであるが、本  
末慶應から始まるので流石に及ぶ極めて短期の  
のまゝである、昔の松本峻烈の揚置いと幕府の取り  
得ず、窮乏微溼の、田形式文を取締つたことさ  
まの、今昔の北問題も甚しい差違がある、荒し  
外交問題がカラオオ、唯に流石な揚置とある  
こと、不文なるんば、或人と一讀の價もする、何事具

味を國も、こと無いたるが、將々亡びんとす  
幕府が怪約國から突きこむ、幕府も  
多んと富強し、困米の極糊塗に揚置の往  
々滑秋名、一属一人として噴飯を禁せよとい  
ふものがある、此書の後編も、この意味  
がある、幕府の政改怪約するもの、人民各々の宗門  
信仰と本質と互におおつけぬと物し、又隠傳と  
鷹し、邪宗門の禁制を撤することもある、其の  
異教問題、おもしろい、百七のおもしろい、  
る、さるを得ぬ、志かし、昔の邪教とある、感  
は、それ役人の眼から去つて、おぬ、慶應と異教  
問題の存否の動機、伸也、西、宣、其の







利産するが出来まの唯此恐入つれと云くせんすんハ  
従令轉教をせしむる故免することの正さるべき事  
ハ、こうろくと一旦入牢しれよの凱歌を奏せし  
揚りしとゆる譯せし轉んがよのハ郷堂に答んら  
ぬまのこまらる所か、續に國前の口供を元清す  
といふ事觀を早し此の詞を種々笑ふべき方法  
を講した、その一、穢多の群、異教徒を放つて  
人交りを絶しめんといふこと、佛僧をくも異教徒  
に改教を為さしめんといふこと、いかにあるか、佛僧の  
説教、嘲笑を以てゆくと云へ何事の効力無つたか  
崎奉行か、此の天後の名案、異教徒四皆び  
あつた、即ち法をなく、荒干名つても分る事あることい

こゝに福を他へ轉ずるをり方少いあるか、大の原安を  
得ることなるもの、後此案を行つて法母も  
多く迷惑を感ずれば、こゝか糊塗策の上乗のよ  
であつた、要するに、是の異教一件、全然幕府  
の敗に帰し、地方高向の全れより面目玉をつぶ  
した、當時佛公使の要求し、この異教徒の拘禁を  
解き、向上全体を大因獄と見做し、監視せよといふ  
事、在つた、幕府から佛蘭西に求め、佛の公使、  
を撤退せよといふ事、在つた、双方を以て、  
とも幕府から内宣、教を無條件で行ふことか、出  
来ぬ、宣ふものを、佛蘭西の連綴を絶つことか、出  
来ぬ、つらつた、  
但し佛蘭西公使は、



ち宣教師を後援するに無かつた、幕府の末路が  
あつたが、この問題に就てると、**愚**の軽重を問ひて  
困惑を極めたこと無

以て政府と争つて一敗路を異あ達しあることなるは一  
つの原因も神意が勤王に連関しと推察したるは、四休と  
お容んずとの思惑より、幕末の勢と改擲したるを更に  
又歴過することなるは、文政を旗印として新政府の  
措置を以てし矛盾の目撃せしあるが、當時の四休も  
由義きうりとのむある、**氣**鋭の新政府の政治家の  
幕末の政治家も七外四使は、**節**を絶つた、**新**  
政府の先づ幕末に定まつた、**果**敢て移轉し、元り  
掛かつた、**こん**が實の容易なること無つた、各藩の者

と割ひあつて、此の二種の移民も収容せしむることなる  
一に其数の三千或る人といふ多敷い、之れを運ぶ船も  
不足を感ずる程の、之れを遂行するに、**年**敷をかけた  
こゝが為めなる、少からざる**四**葉を要し、**此**の**狀**改  
困難の新政府の如く、**こん**て**高**意し、**此**の**事**は  
さう、**一**歩に移民を遂行し得ぬか、**此**の**一**つを  
信長人の集むる原因にもあつた、**此**の**移**  
住は、**此**の**藩**の少からざる、**此**の**所**かあつた、**此**の**藩**は、**此**の  
しに**所**もあつた、**政府**の**此**の**移**民を遂行し得ぬか、**此**の**使**  
役もさうと令し、**此**の**使**役の**此**の**使**役、**此**の**使**役、**此**の**使**役、  
しに**亦**もあつた、**又**改宗を促す、**此**の**使**役、**此**の**使**役、  
つに**藩**もあつた、**大**略無効であつた、**政府**の**此**の**措**置



ハ異教徒の集團を教養するをせし外交官使  
臣の視聽を辟けんとの方略に出たのであるが、  
四の使臣は之れを黙過せし、幕府も佛國にけが  
抗議の衝とあつたが、明治ころつてハ英佛其他諸國  
とあり強んと國交を破んとするもの外交談判  
が志むくあつて、弱る我而も困人にかゝり困つた  
飽をも異教徒におぼさるる憂を後めらうつた  
又移住者に對し、帰村の辭せしめよとの勸告が外  
國から強迫に出たのは、邦を日本政府に困惑するの  
と應じようつた、若しこれに應じらうと新政府の弱  
味かゝる現は、徳紀の全く地に墜らんす(おま)  
幕府と新國との此點に於て、強弱のおまが

明治維新の徳紀は世界の文化を攝するにあつた、  
面々大寶の舊に度ふといふの心あふから此間、  
七ある、大寶のゆに度ふといふの徳川氏も、  
習の立身道を免かんとするのであつたが、  
とかからみつき、神徳者を各者の上に置  
あるから、神道を四友とせよ、  
新教の此意味は、  
徳川の末路は、  
と、  
一、  
行々るべき元が

西洋の潮流が日欧東漸する



まつて、大寶令の舊に戻ること、神皇正統記も日本七揺き  
出と神祇書も其内、廣く見れば、神皇正統記も其内、  
淵源をみるに、唯神皇正統記も其内、無論改暦の  
行の元妃の、折角各藩、異教徒を移して元妃が  
改暦の元妃の、折角各藩、異教徒を移して元妃が  
ことか、実行せられた、又岩倉大使が外國へ派せられた  
事、七起り、岩倉の異教徒を假し、其の  
強硬論者であつた、其の外、行つて見ると  
利する、日本の評判が、宗廟の自由である  
所、對等條約を、思ひ、其の如く、其の如く、  
元妃がある、其の如く、其の如く、其の如く、  
を本わ、悔く、其の如く、其の如く、其の如く、  
方針を改め、

ハ、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
四千の異教徒の、其の如く、其の如く、其の如く、  
其後、神皇正統記の、其の如く、其の如く、其の如く、  
ハ、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
以上、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
の、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
その、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
二日録

○梅澤博士の私人、其の如く、其の如く、其の如く、  
がある、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
して、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
一覽、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、



裏の八牧百峰が由来を書いてある。先生の書は  
まう装幀も贈り物がある。贈りに先は高橋節  
直下にある。此人の膳所の八幡の言句は高橋多門  
と云い相傳ふ。その詞もある。山陽と経復日し時  
論を裁りし。多門も酒を嗜む。山陽と酒友で  
七女つれといふ。高橋家は累代膳所高橋の家元  
の家筋は山陽在世の頃の高橋太夫の正四と云い  
中流と強し。高橋多門は此家と云いあり。あ  
つたの如く日本外史も終に高橋家の有るゆへに  
といふ。高橋節直は山陽と経復文句が深か  
つた日くく山陽の歿しに於て山陽の経復は  
ほそくして歴史學の要の一部をカケる。贈り物

といふ。元々高橋家：帰しといふが、そんを今  
の山陽節直といふ人の兄が高橋節直といふつれの  
を残念がつておれた。右の日本外史の字  
本は節直の山陽歿後贈つたもの。お受する。各  
冊の標記は山陽自筆と記し。そのが贈り物と  
ある。字は高橋節直の書風である。経復米茶  
と訂字がある。併し山陽自筆といふが、  
無い。多分節直の膳所と云い。そののひある  
もの。高橋が山陽と云い。そののひある。山陽自筆  
と考へてある。そののひある。そののひある  
けいも。節直といふ。そののひある。節直といふ  
破る必要もなき。ありと云い。真蹟に對する。こと







日本外史二十卷先の頼翁所著也暇所  
為君の即事書等語一本賸言向後會  
病也輒等奉遺旨裝而賜之君是裏得  
為之通議甚喜之也母來者病猶就牀討論  
不止況若此若翁注一生心血者視之通議其  
言不啻也而君親之歿後不及親上下其議  
論是輒等所惜而不多言也

時

天保三年歲在壬辰冬十一月

門生 牧輒謹識



あはれ... 雪... 山... 松... 寄書二十餘名の合作吟の文字

松蔭の句其他 (九四) 遺墨鑑寫眞の四分の一

かきくつれ 蠅... 松蔭... 遺墨鑑寫眞の四分の一の文字

おらが世の自畫賛 (五七)

おらが世... 自畫賛の文字と人物の簡筆描

詩箋の俳句 (七八)

おの... 詩箋の俳句の文字





日本外史二十卷先の頼房所著也  
頼房の御事

○此の神田の山鹿の左の一書を得た

一六二〇紀年 續

九冊

此書永正の撰者石川公勤(清秋)の  
編す所文政十年丁亥五月の題言  
あり山宮山根の序を載す書  
名爲し頼房の御事と云ふ、慶  
長八年八月十日威公山依伏見の城に  
生るる女児なり文化十三年八月十九日  
武蔵薨すも又終る廿二日同ニる十四年  
威義肅成良文武七公の事蹟を  
年代記凡三年月を述べて叙す一部



久戸列公の紀略より、八冊あるべきもの  
末巻武公の部一冊缺く、外に續一篇二冊  
あり、文化文政中の事を叙す、外に文  
籍考をある未する、富命ありて續篇  
と載せし、續篇の巻首に紀年八巻  
に續く、哀公二巻を添ゆるの叙あり  
り若者あり曰一也、此書未だ刊行せ  
んとす殊に考す可也

六月三日記

○狩谷振首曰狩日本金石文振本大取交  
六十枚なり、文行書と楷を各一方あり、購ひ入る、左

の又臨し、しきものあり、あるべき家花の約面  
汗の日本金石振本あり、是れとの重複もせし  
ハ一筆は得ざるを喜ぶ、今朝點検するに、  
振首自らし、紙背に標記し、富命と認め  
亦狩の一字を綴し、花記に代へたるもあり、大部分  
ハ鐘振より、金石記の署名のもの、富命あり、解  
んたるものあり、却つて求めやすし、富命とあるもの  
金石家の却て誤とするものあり、振首の収蔵の物  
程豊にありし、富命とあり、富命とあり、富命とあり、  
富命とあり、富命とあり、富命とあり、富命とあり、  
例得かたきものあり、此由にあり、富命とあり、  
ひとするものあり、未だ全印を敷出せしものあり



く中より全に標記を溯きしめりてある  
ものあり目録を必すの炊しきりあり先づ市を  
のしめを採らん左の如し

お物松平寺鐘銘 建久七年

山江菱山寺鐘銘 建治二年

長門厚東郡善海禪寺鐘銘 永禄七年

伊都伎治所新寺 治承元年

お物星谷寺鐘銘 嘉永三年

巨福山建長寺鐘銘 建長七年

天台別院慈光寺 寛元三年

武州恩田松栢萬年禪寺 正中二年

法隆寺造像記

河内觀心寺鐵燈台銘

貞永二年

鎌倉八幡宮鐘銘

正和五年

武州河肥庄新日吉山王宮鐘銘 文永元年

同是立郎堀井郷宮崎山鐘銘 正安二年

讃物金刺寺 大永二年

河内屋崎山寺 元院 貞永二年

信物龍鷹郡松本瑞祥禪寺 寛永十三年

日浦野庄龍泉寺 永和 貞永元年

河内萬福寺 貞永元年

久良岐東漸寺 永仁六年

旗上八幡宮 文治二年



金剛山寺鐘銘

寛元四年

觀應碼

延曆寺西齋鐘銘 左文 天長三年

東大寺洪鐘銘

金色院鐘

建武二年

播磨尾上鐘

大岡塔銘

東大寺大佛蓮座

○昨日芝倉松寺：秋吉、夏五十年進起、今も  
余前原奥平も印時、後々のことを以て、今も  
を期して、事と妨げんと果さるる人に托して、奥平  
の書幅五と今も、遺りし聊か微表を表す、

十二行

當日江本千之の漢説中、此書、夏を語し、彼を以  
つと謀叛と云ふ可らむ、今の大匠、原効と曰、視  
すへき、よと云、一ハ吾表を得、今、此集、今も  
今、漢、依、漢、後、人、も、少、か、り、と、か、此、日、合  
集、一、弘、教、者、遺、稿、を、印、刷、し、も、領、つ、余、七、一  
部、を、得、り、

六月四日記

○大波の石川正儀といふ未だの人、余も書簡、廿、免、集  
の経歴を、旋、終、に、讀、ん、び、二、通、の、書、簡、を、賜、り、  
一、通、十、時、梅、屋、の、扁、額、と、仕、立、あり、一、通、帆、立、本  
面、ハ、未、だ、心、さ、り、文、面、格、お、の、致、味、あ、る、と、云、  
と、も、た、こ、直、六、時、也、既、に、書、簡、免、集、を、廣、し、  
了、後、ろ、ん、ど、も、雜、問、の、卷、中、に、收、め、て、保、存、す、べ、し



(三月四日記)

○大坂老若の國氣益壯の外に今も味を有  
んるものやうに考へておぼくは此頃より多  
く侯爵  
家外に於ては津山に幕を集められたことか  
り、亦急須を多く集められたことある、  
か果てしなく今も存しおぼくは此頃より  
どんる動機でコンナものも集められたこと  
の實物を完まへから、體たりの集められた  
やれりうに考へたが、免るものも集められた  
を有せられたこと思ふ、  
やらんれくしいが、今も十個以上の  
い、急須をもつておぼくは多敷に  
十二行

る果に入らぬとあるといふ

二月五日記

○この故朝鮮本王の四葬、面倒を生じたこと、  
て朝鮮國王と標書した銘旗を行列に  
お出したこと、  
とだが、合部後、  
日本の皇旗旗を用ひること、  
くして満族、  
く、厄収ること、  
而して世子の妃、  
習道より考へたもの、  
下の悦服を懐いたこと、  
したか、



# 印刷史上の驚異

## ガラス活字の發明

早大出の青年科學者  
藤伊魁氏の研究完成す

特許八十種を得た發明家

ルネッサンス文物興隆のふん圓氣の中にグーテンベルグが生み出した鉛の印刷活字は、その後ブルースの手廻し活字鑄造機の發明によつて、その製造の進歩と使用の廣汎とは驚くべきものがあり、今日に至る五百年の活字の歴史は、人類文化への貢獻に滿ちた光輝あるものとしてわれわれは見出すのであるが、たゆみなき科學の進歩は、更に

**最近** ガラス質の印刷活字の發明家を出して印刷史上に一轉機を畫せしめしつゝある。

### 堅牢で經濟的

研究の途中に新聞記事でヒントを得た

藤伊魁氏談

氏を訪れると見るからに堅牢にして精巧なるガラス活字を手にしてその發明の秘密を語る。これの動機となつたものは二年前のこと鉛活字の使用から被る鉛毒の恐ろしさに刺戟されて、どうかして鉛に代る何かで活字を造らねばならぬと考へたことにある。のみならず鉛活字は、磨滅力も大きく、且高價でもある。もつと經濟的な物質はと思ふうちにガラスでやつては如何と氣づき、これによつて研究を進めて行つた。最初のうちには熱の扱ひ方によるためか、ガラス質の缺點がそのままに出で、出来た活字は冷える時の収縮から来る表面張力の關係でガラス面が反身になり、且破損しやすくてその上にガラス質中に數多の氣泡さへ生じて頗る不満足な成績であつた。が、いろいろと研究を重ねるうちにガラスが熱の不良導體であるゆゑに、これを

**再鑄** したり濃度の關係を

やうとしてゐる。即ち市外西巢宮に、藤伊魁氏研究室を起して總ての發明に専念する藤伊魁氏その人である。氏は早大理工科大正二年出身の青年科學者で、すでに氏の考案に成れるもの八百餘種のうち特許を得たもの

**八十** を算する全く隠れたる發明家である。目下は實験工場にあつてガラス活字の實用的注意を各方面より得て一層の完全を期し鋭意研究に没頭しつゝある。

海軍に加入するとよつて收縮率も小さくなり氣泡も空氣の入るの點眼に付隨して出来る内部の眞空洞であることが判明し、完全にこれを防ぐことも出来た。しかも一般にこれれ易いとされるガラス質も表面積に比して質量を増せば非常に堅牢となることは、コップに比して堅牢とされる水晶の印刷が主としてガラスのイミテーションであることに徴してもうなづかれる事實である。ゆゑに次第に硬質且堅牢の活字が出来る様になつて

**最近** やつと完成の域に達したのである。研究の途中、ウィーンの一人がセルロイドの如き柔軟性ガラスを發明してステッキを造つたといふ新聞記事は、私に多大のヒントを與へたもので、このガラス活字にも幾分の弾力性を與へ得る工夫をしたところ、紙上に印される文字は頗る鮮明なる字劃を示して従来の鉛活字をしのぐ

ものがあつた。目下の程度でこれを鉛活字に比較して、すぐれた點と思惟 されることを擧げると次のやうである。

(一)鉛毒を全く被らざること(二)鉛に對して十五倍乃至二十倍の硬度を有し磨滅せざること(三)ガラスは酸化しない故に、酸化による分量の減少なくまた酸化性インクの使用も可能なること(四)鉛よりも質緻密なる故に運搬のつきがよく、且つ軽い爲に運搬に便なること(五)ガラス質は熱の不良導體で膨脹係數小なれば紙型は鮮明にとれること(六)原料が鉛に比して驚く程低廉にして經濟的なること

即ち鉛の輸入を減じてわが國に無盡蔵に産する石英を使用することになる上に石英粉一匁に對してガラス活字四匁を製造することが出来る。以上の

### 印刷史上 特筆に値す

東京高等工 伊東亮次氏  
醫學教授 藤伊魁氏談

東京高等工學學校教授の伊東亮次氏も、かねて藤伊氏のガラス活字に深い興味と同情をつないでゐたが、完成したとき欣然として語る。人間の生活に必須なものとして衣食住の他に

▽交通 印刷との存在を數へる私は、ガラス活字の發明を以て人類への偉大な貢獻とも考へるのである。最近における印刷界の傾向は如何にして鉛活字を避れるかといふこと、如何にして簡便に

ことが出来る以外に、甚だしく經濟的でもあるので、たゞ今では一人一日千二百個しか製造出来ない手工業設備を機械化するために活字鑄造機の考案をしてゐるが、植字工の採字に都合よくするために透明に光るガラスを灰色又は紫色等に染め、或ひは艶消しにするなど、生きた發明として

**實際** に世に用ひられるやう、種々研究を重ねてゐる。氏の語るところは、驚くものをして眞にその成功をよめるにはおかないものがある。

してしかも最も能率的に植字するかといふ問題を中心として進んでゆくやうである。後者においては、ライノタイプやモノタイプの發明となり

▽前者 にあつては英國における寫眞印刷機の考案となつて現

### ユシ ッナ

つ勝はのもるな善最



池田 坂赤 京東  
社 會 資 合  
會 商 車 動 自 葵

**諸點** から考へてもガラス活字を一般に使用することは、印刷の動機であつた鉛毒を防止する

れてゐる。この際にわが國から藤伊氏出でてガラス質の活字製造に成功したとは、世界の印刷史上に特筆すべきものでなくてはならない、鉛よりも安價でしかも耐久力あり細かい字畫までガラス活字は鉛活字を全然駆逐するとははゆかすとも、大部分その障礙に侵入するのではあるまいかとも思はれる」と

日ハ早ヤ別置の譯カ  
委棄しては舞ハの例ハある、表ハ不ズその折

〇日又ある類に出来たる新  
少紙や能徳多者数人敢て  
あまのくろハが復畢ハバ  
直に室龜の林火料とるる、性  
ハ有つて併存の是要を感  
る、こもあ、まんを別置す  
こことともあ、ひひさハが  
経ハ多、等、日、校、時



切り抜いて保存するものと、日記の中へ、収めることと  
いた、各所から形は入るべくする書物、故物の標本  
をもつて、何々の用を立つものもある、旅日記の巻  
頭：収めのある回書画をもつて、棄て難いものがある  
日記の表紙、重宝とて貼附するものがある、旅日記  
添くこととして、おる、左へ、収めたいものも、能平  
賀、源内のものも、類：関する記、おる、おる、おる、おる  
ことともある、おる、おる、おる、おる、おる、おる、おる、おる

天笠浪人、福内鬼外、森羅萬象翁等の諸號を以て屢々戯作に筆を執つて居ることである。明和七年に出した淨瑠璃本『神靈矢口渡』の如きは有名なもので、その他にも斯る種の著は『源氏大草紙』『金毘羅利生記』『荒御霊新田神徳』等枚擧の煩に遑ないほどある。

斯る多方面の彼が何で西歐の繪畫、即ち油繪とか銅版畫とか言ふが如きものに對し無關心で居る理由があらう。これまた疾より注目し油繪の如き模倣を試みて居たのである。彼の作と傳へられて居る『西歐美人の圖』(大阪鹿田靜七氏所藏)の如き、粗硬のタッチ、變妙な表現、幼稚極るもので、藝術的價値そのものから言つたら殆んど取るに足らぬものではあらうが、身畫家に非ずしてなほ斯る方面にも手を着け、フレスシユの一技巧として率先社會に紹介せんとした行爲は、何處までも偉として稱揚せねばなるまいと思ふ。そして斯る彼の徳徳の結果油繪や銅版畫を試みるに至つたのが、曙山佐竹義敦、羽陽小田野直武、嘯月亭佐竹義躬、獨元齋荻津勝孝、雲夢田代忠國、その他菅原寅吉、羽陽の子の小田野小武等、所謂秋田派と稱する一味、及び江戸の司馬江漢その人なのである。

佐竹曙山は右京太夫義明の長子で秋田の藩主である。性英明にして、當時の爲政者としてはかなり進取的の思想を有して居た人であつた。隨つて彼は疲弊せる領内をして如何に豊潤ならしめんかと、夙に藩政の改革に志して農業その他經濟政策には意を注いで居たが、斯る結果は鑛山を經營し大いに

殖産興業を計らんと、安永二年の頃、當時の新智識として名聲噴々たる平賀源内を招聘し、藩政の顧問たらしめて阿仁銅山の調査を命じたのである。曙山は斯くの如く爲政者として間然するところなかつたと同時に、また藝術の愛好家で謂はゞチレンツタントとでも稱すべき人であつた。殊に彼は繪畫を愛好し重役の益戸滄洲や、角館城代の佐竹嘯月亭や、城代附の小田野羽陽等と共に常に畫筆を執つては娛しんで居た。ところで秋田へ赴任した源内であるが、嘗て仙台の伊達侯の爲めに鐵山を調査したり、また秩父山より爐甘石といふ礦物を發掘したりしたことがあり、此方面には相當の經驗があるから留ること數ヶ月、蘊蓄を傾けて調査し只管劃策努力するところあつたが、閑話の析、曙山が繪畫を愛好するのを知るものから、彼に向つて西歐の繪畫、即ち油繪とか銅版畫とかのことを説いたのである。曙山元より新智者の憧憬者のこと、ていたく共鳴したが、それにも増し蠱惑的な異國情調に對するのそれよりして、好奇心のひたぶるなる躍動を覺えずには居られなかつた。こゝに於てか、同じく進取的の思想を懐き、源内とも別懇なる同趣味の小田野羽陽と共に斯畫の研究に志すに至つたのであるが、これが動機となつては家臣中から續々と研究者が出るに及んだのである。なほ曙山には『畫法綱領』や『畫圖理解』と言ふやうな著があることも附記して置く必要があらう。

斯くの如く、源内の洋畫に對する感化影響は先づ秋田の人々に及したのであるが、次いで十年餘りを経て及したのは例の江戸の司馬江漢である。江漢が紫石仕込みの南畫や春信張







筆者在外尖者居中左右能輔可稱奇品小標記用滿漢字亦奇

梁同書云京師劉必通孫枝發最擅名予常用其筆健銳圓齊其製尤佳



京毫水筆  
林賽元  
清製記



京  
都孫枝發水筆



京  
都狼毫水筆

米菴 河三灰珍巖

名紙類

京  
都狼毫水筆

榮者屋外尖者在中左右能輔佐之可稱

佳品

北京水筆

伍分壹枝  
蔣瑞元製

鋒不弱腰不強淡墨以學曹娥頗遠人意

京毫水筆

伍分壹枝  
蔣瑞元製



書齋

米庵の筆譜に就て

市嶋 春城



第五號

文房四友の内墨譜祝譜は日本に於ても幾種  
 が出てゐるが、筆譜を版にしたのは市河米庵  
 が、其の藏筆譜を刊行したのを初めとする、  
 米庵は多方面の趣味家で、書畫骨董を多く集  
 めた、それが概ね珍奇のものであつたことは、  
 著した小山林堂書畫記に依つても知らるゝ、  
 回祿の災を氣遣つて珍藏の書畫幾十幅を、聖  
 堂の藏に預けたと云ふは何人も周知の事實で  
 ある、此人が書道専門である所から、多くの  
 筆を蒐集したのも不思議はない、當時は未だ

支那に筆を作る名工あつたので、追々集つた數は七百枝の多きに達したといふ、このことは筆  
 譜の跋を書いた尾張の大學堂宣尙の文に見えてゐる、そのあまた集めた内から粹を抜いて百枝  
 を筆譜に載せたのであるが、如何にも念の入つたもので、筆の形貌をそつくり寫して、毛の色  
 から筆管の色、貼附してあるペーバ迄も彩色を入れ、宛がら實物を見るの思ひあらしめ、各筆  
 に就て其の由來や優劣の月旦などを録してゐる、個人所藏の筆譜ではあるが、ある時代の名筆  
 は殆んど網羅されてゐるといふことが出來よう。

米庵の此の筆譜を出版したのは天保五年であるけれども、それより三十年前享和の歲に譜の  
 稿本は出來てゐたのである、そのことは跋にも見えてゐるが、私は米庵自筆の稿本を所持して  
 ゐる、それには百筆齋筆譜と標題が書いてある、米庵に百筆齋の堂號があつたことがこれで知  
 れる、卷首に佐藤一齋の序が收めてある、版本の一齋自筆の序と對照して見るに、終りの方が  
 聊か異つてゐる、一齋が自筆で書く時に改めたと見える、尙、卷末に米庵の跋があるが、これ  
 も版本の跋に對照すると、少し文章が違つてゐる、稿本には筆の形貌は書してない、各筆の註  
 も版本のとは異同があり、排列の順序も可なり版本と違つてゐる、そして版本には一齋の序の  
 外に栗山淇園寬齋の序がある、これと稿本と異なる所である。

此版本は世間に流布してゐるので珍本ではないが、今は稀觀のものとなつた、此の雜の誌逢  
 卷首に版本と稿本の一斑を掲げることにしたるにつき、こゝに聊か解題を附する。

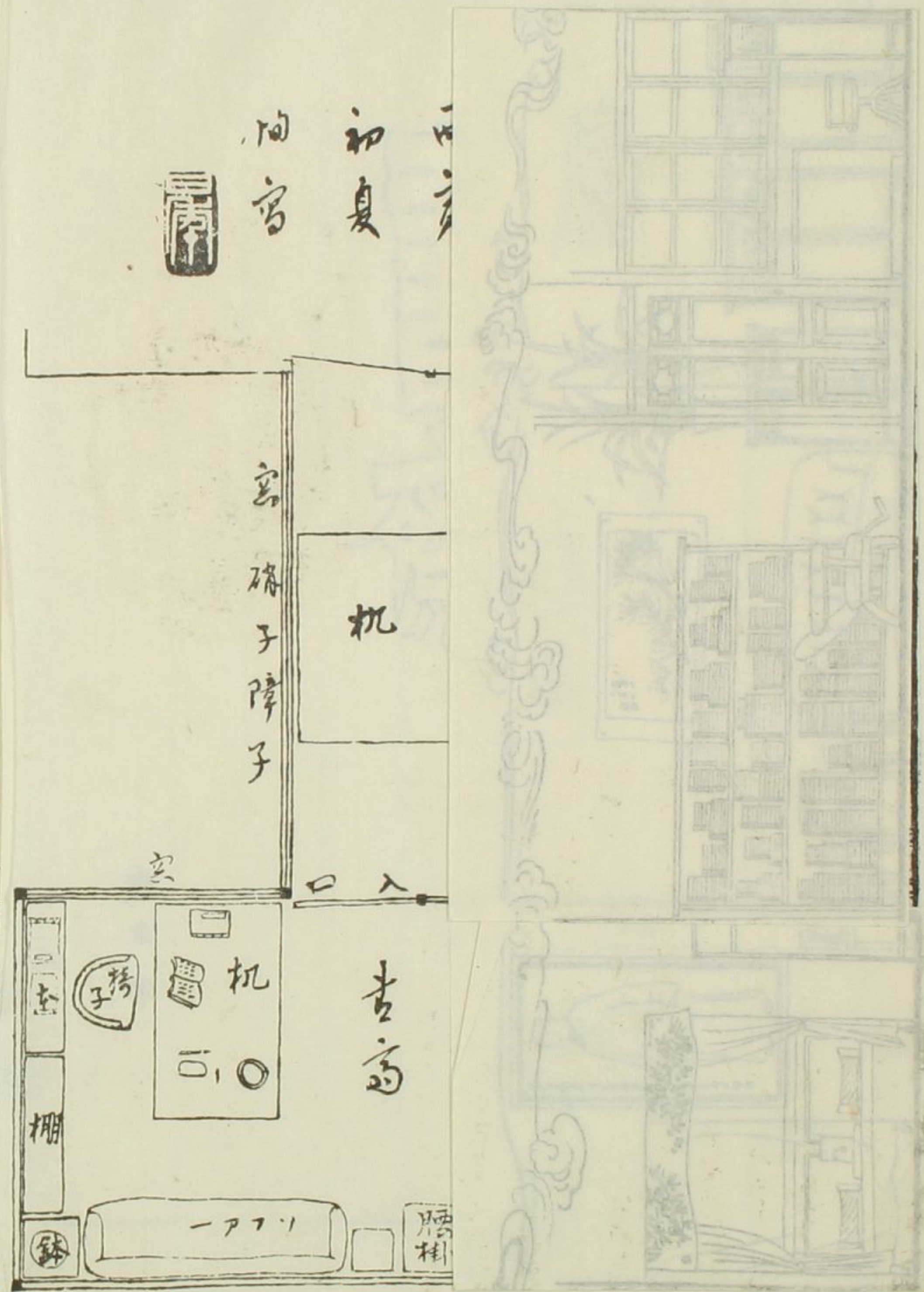




吳昌碩翁の書齋

吳昌碩翁の家は、上海の北山西路の吉慶里と云ふ廊路の中にある。滬甯停車場から老閘橋の方へ足をむけると、いやでも狭苦しい街を通る。それが北山西路である。まるで貧棒人の巢だ、不潔と混雑とが一つばいで、殆んど足の踏み入れどころもないやうな氣がする。其の街の裏屋に翁の住家があるのである。門の黒い扉に貼つた大きな赤紙に、翁の自署された「君子鑒樂、賢人孔安」の蠟燭文字

が雨うたしになつてゐる。中へ這入ると内庭に續いて明ッ放しの一ト室がある。三方に壁を廻らした十疊許りの板間で、壁には畫幅や書幅が隙間もなく掛けられ、室の眞中には雜木の卓や几が置かれて居る。その部屋を通過けると直ぐ段梯子がある。上ると取附きの部屋が畫室である。それに隣つて書齋がある。部屋の入口に老軀近來病を得て面接するのが憂いと云つたやうな貼り紙がしてある。



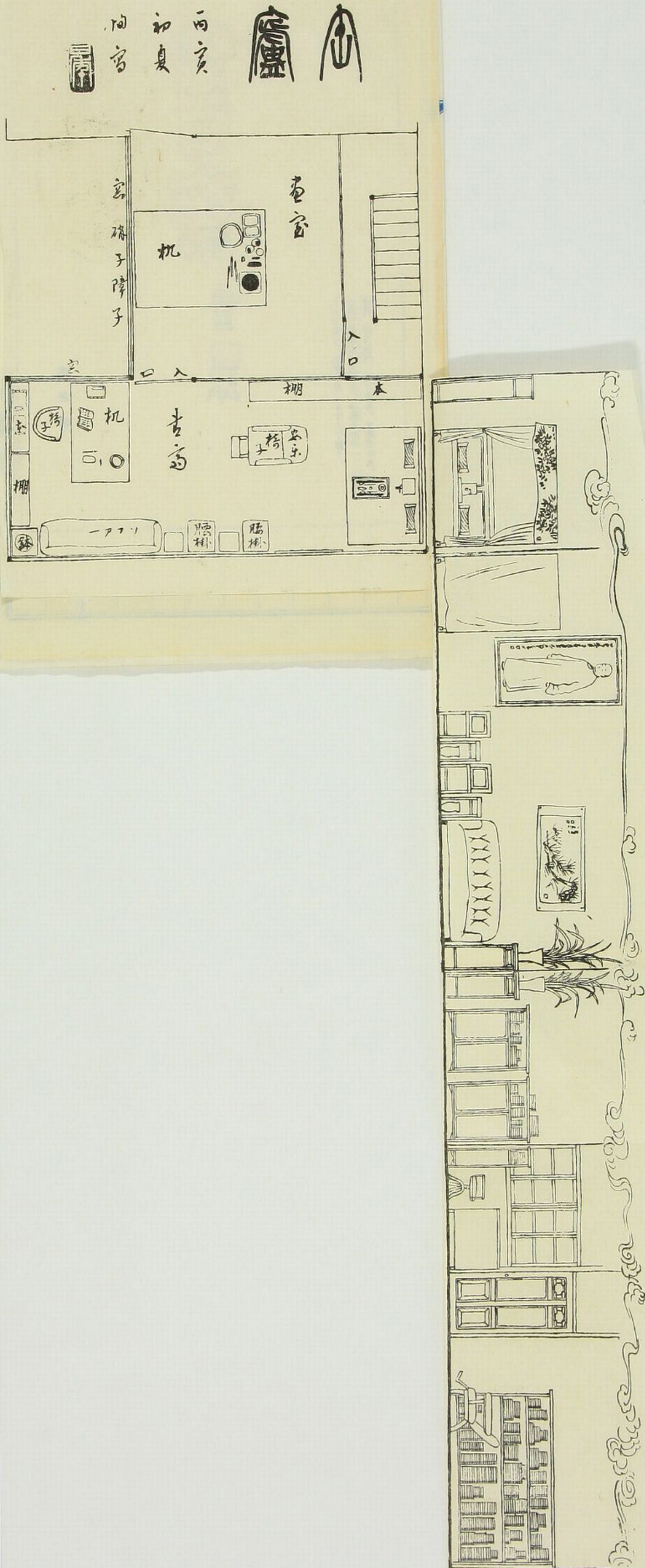




吳昌碩翁の書齋

吳昌碩翁の家は、上海の北山西路の吉慶堂と云ふ廊路の中にある。滬甯停車場から老閘橋の方へ足をむけると、いやでも狭苦しい街を通る。それが北山西路である。まるで貧棒人の巢だ、不潔と混雑とが一つばいで、殆んど足の踏み入れどころもないやうな気がする。其の街の裏屋に翁の住家があるのである。

が雨うたしになつてゐる。中へ這入ると内庭に續いて明ッ放しの一ト室がある。三方に壁を廻らした十疊許りの板間で、壁には畫幅や書幅が隙間もなく掛けられ、室の真ん中には雜木の卓や几が置かれて居る。その部屋を通抜けると直ぐ段梯子がある。上ると取附きの部屋が畫室である。それに隣つて書齋がある。



8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2



書齋  
會農

金農、字は壽門、號は冬心、又稽留山民、錢唐  
布衣で詩書畫三絶の人、揚州八怪の一にかぞへ  
られて居る。乾隆甲申に七十八で逝く。

第五號

書齋士

十二行



吳昌碩翁の書齋

吳昌碩翁の家は、上海の北山西路の吉慶  
と云ふ廊路の中にある。滬甯停車場から老閘  
橋の方へ足をむけると、いやでも狭苦しい街  
を通る。それが北山西路である。まるで貧棒  
人の巢だ、不潔と混雑とが一つばいで、殆ん  
ど足の踏み入れどころもないやうな氣がする  
其の街の裏屋に翁の住家があるのである。  
門の黒い扉に貼つた大きな赤紙に、翁の自  
署された「君子鑒樂、賢人孔安」の蠟燭文字

が雨うたしになつてゐる。中へ這入ると内庭  
に續いて明ツ放しの一ト室がある。三方に壁  
を廻らした十疊許りの板間で、壁には畫幅や  
書幅が隙間もなく掛けられ、室の眞ん中には  
雜木の卓や几が置かれて居る。その部屋を通  
抜けると直ぐ段梯子がある。上ると取附きの  
部屋が畫室である。それに隣つて書齋がある。  
部屋の入口に老軀近來病を得て面接するのが  
憂いと云つたやうな貼り紙がしてある。

書齋士

29







修りしにその例の行列の圖や徳川三家の坐帳  
 の圖もかある、朝鮮使の印が江尾、末のオオの金  
 中法師の款待と云々の其の順序や日取ら  
 どもある、此類の図は古きとてや、毒しいものもある、  
 集外歌仙の後水尾上皇が御自撰のうつて東橋  
 院の屏風の書畫歌を貼えたと傳へてある  
 ものの畫も淡彩が施してある寛政年間刊の刊  
 本にある、燈火占と支那の書に依つては、その  
 を引きよるに和神が附してあり燈の圖が多くあ  
 るか、その支那の原を：掬つては、そのく、彩毛  
 まむ所しもある、その印刷物もある、寛政  
 の一考の神傳傳り、ある時代、一時流行した

十二行

富言しある後、推し入るゝ、但しおわろ  
 いものひらるゝ  
 六月六日記

宮内省本

北宋版大藏經に就て

不倒翁

宮内省圖書寮に、北宋版大藏經が藏されてゐる事は、藏書家連の一般に熟知する處であるが、一体どうして此經  
 が御物となつたかと調べるに、それは元來、石清水八幡宮所藏のものであつたが、轉轉して東京市下谷區池の端仲

本 首 終

茂木骨竹山房

三



町に居た古書籍店(一名バイブル)齋藤兼藏君の手に入った。齋藤君は、それを支那人某に賣却することを以て、直段の交渉中であつたのを、島田春根翁が聞きつけて、大に驚き、恚かる貴重の書籍を外人に賣られては堪つたものではない、どうか思ひ止まつて貰ひたい、其かほりに、外人が買ふ値で自分が引受けるに約束し、遂にバイブル主人をして、支那人其他の外人へ此の藏經を賣ることを断念せしめた。元來春根翁は、赤貧洗ふが如き無一物の免許取りであるから、勿論、翁自身が所持金で買取る餘地はない。こゝに涙の苦心物語が生れる。

春根翁は思案の末、淺草の觀音様の御座る淺草寺に行つて、時の住職に面會し、寺に買取つては如何と相談したが、同寺には既に鎌倉鶴ヶ岡八幡宮に在つた南宋版の大藏經があるので交渉は遅八刻であつた。

〔附記〕 鶴ヶ岡八幡宮に、大藏經を納めたのは、源政子が、在世中支那から何部かを買取つて、其内の一部を納めたものだ。尙他の一部は、伊豆修善寺に納めたといふ。

倅で、春根翁は更に大内青嶺居士を訪ふて、曹洞宗の某有力者に交渉して貰つたが、これも不調に終つたので、今度は方面をかへ、東京市内の大富豪連に交渉の手を伸ばしたが、孰れも「御經では」と勿付けられた。翁は此話が始まつて以來、十日日といふもの、殆んど寢食を忘れて奔走したが、徒らに勞して功が無かつた。併し翁は少しも落膽せぬ。人を怨まぬ。何故なれば佛天必らず翁自身を護れることを知るからである。風流ならざる處、又風流だ。翁は更に邁進して、杉聽雨氏を訪ひ、宮内省に御買上を出願し、終に其目的を果して、北宋版大藏經は圖書寮の書庫に納められ、海外流出を免れ得た。春根翁の赤誠は、日本圖書史上、永く光を放つ次第である。

處で其後、此藏經を調べると、大分の不足があるので、藤堂祐範氏が、宮内省本と同版の藏經が大阪の森本翁の

書庫にあることを探知し、取調べて見ると、この經本は、石清水の舊藏で、宮内省本の、わかれ本であることが判明した。即ち宮内省本は、元、石清水の藏書であつたことが確實になつたのである。而して藤堂氏が調べを進めると、大般若が殆んど全部と、淨土三部經、瓔珞經、維摩經、起信論、法華經、稱讚淨土經等がある。それが世にも珍らしい零本であつて、此版は福州版で、開版の時日本留學僧の慶政や行一等が、開版の資を喜捨して居る等、日本人には一層の親みの深い藏經である。今回森本翁は、此藏經をまとめて、宮内省圖書寮に納め、圖書寮本と合して、完璧ならしめるに云ふ事である。誠に近來の一大快事である。

元來石清水の藏經は、北條重時が建立したもので、重時は忍性菩薩の歸依者である。忍性菩薩は、大藏經を十四部各所に納めたと傳られて居るから、此藏經も同菩薩の、寄納したものではないかと思はれる。

●附記 世界の貴重圖書として宮内省圖書寮に所藏されてある宋版大藏經は五千五百部だけで缺本殘冊六百九十冊は永年の間尋ねられてゐたが殘本全部は十四日はからずも大阪市西區靱上通り實業家森本佐兵衛氏が宮内省に寄付することになり杉圖書頭はこれをどりしてゐる、畏きあたりでは森本氏の奇特の行爲に對し金一封下賜の御沙汰があつた、杉圖書頭は語る「この大藏經の宋版は今日では散逸して本家本元の支那にもない、外國の圖書館には或ひは一部を所藏してゐるところもあるかも知れぬが、かくも全部六千二百九十部が揃つたことはこの圖書寮以外にはあるまい、こんど手に入つたのは昔神佛混淆時代に京都の石清水八幡に藏されてあつたのを明治三年神佛分離となつて八幡宮ではこれを賣物に出した、その時森本氏が買ひとり菩提寺楓寺に納めてあつたのを同寺が



又も賣物に出したのを五千五百部ある人が買ひとり残本即ち今日の六百九十部を森本氏が再び買ひとつて藏してゐた、その五千五百部だけは幸ひに手に入れてあつたものです、この本は一部三百圓で買ひたいといふ話もつゝたさうだがこの値段でも安いので全部で廿萬圓は下るまい、森本氏の好意によつて得たことは實に喜ばしい話です（六月十六日、東京日日新聞）

—編者曰参照として抜萃轉載せり—

○春湯を夏行の新か後とねも南音録あり  
能依も分花家のねも湯をぬり、めと此頃紅  
も赤行も、此流中出もを感する、新村係士  
の例故記ひある、身徳その他、ねも、就この句ある  
ことい近年、らうも未だかぐもえんを換出する  
うへねあ、骨か折んるのたまふ、誰んも指を染めぬ  
新村のねも、ねも、ねも、流石此道の熱心家  
けんねも、海梅してゐる  
七月九日記

十二行

巡回中和蘭に至り父君の舊友や其子孫の消息を尋ね懐舊の情に打たれたが、一日ハーゲ市のホテルから日本公使館に三人連て出かけて行つた時公使館の側の公園近くにさしかゝると後から小學校の生徒が数人學校歸りと見えて肩からカバンをさげて後からついて来て何やら聲高く同音にうたひだした、フト聞くと耳をうつものは例の

ツレー ヤツパネース エネ バス・バス エーネン ストレーキストツク ダール ヘーン ハーン  
の童謡である、夫れは出發前日本に於て榎本子爵に告別の際子爵の口から親しく聞いた數十年前和蘭留學生在留當時の童謡の夫れではないか、今更感慨無量で聞きほれて居ると傍なる公園の木立の中から風采賤しからざる一老紳士が突如として現はれ、子供達に向つて何やら一喝したと見ると子供達は雲を霞と逃げ去つた。

跡を見送つた老紳士は澤氏一行に向つて帽子を取つて鄭重に會釋し、さもく耻かしげに英語で子供達に代つて無禮をくりかへしく陳謝して去つて了つた。澤氏は早速榎本子爵へ向つて今日遭遇した事件を報じ今も日本人に對する嘲笑の童謡が行はれて居ることを告げたといふことである。

今から六十有餘年の昔和蘭派遣使節一行中の不心得から出來た童謡が今も命脈をつないで居て、日本人を見る度毎にそれが口の上る機會はよし少くとも、和蘭人の心の中には此童謡がよみがへつて來るに違ひないことはあまり名譽のことではないが、未だに其童謡が存在して居るといふことは趣味の上から面白い事實である。

大正十五年六月十日、原稿メ切に際し急遽筆を執る、

異國俳趣記

文學博士 新村 出



俳書類に見えた異國情趣の句は、十五年前小泉迂外氏が風俗志林第二巻第一號および集古會誌壬子卷四に摘録せられ、宮武氏の川柳叢書第一篇の附録にもとりいれられてあつて、古く柳亭種彦などがよく俳句を考證につかつたその流れを汲む道すぢであるが、私も同じ道すぢをたどつて俳書のうちから南蠻紅毛にちがひない句を拾ひあつておいたことがあるから、この機會を利用してかきつけておく。成るべく小泉氏の分と重複せぬやうにするが、興の向ふところ多少同句がまじるかも知れない。

寛永以降の貞徳派の句集には異國的情趣のものが甚だ多いのは時勢上自然である。タバコやキセル、鐵砲や遠目鏡、時計、カルタや葡萄酒、さてまた南蠻船とか黒船とかいふ題目、吉利支丹に關するものも散見する。最も多いのはタバコの句であらう。私がしばしば引用した貞徳の油畫の句の如きは唯一の例かと思ふ。寛永十年に成つた松江重頼の犬子集はこれらの種類に富むが、貞徳自身の作も多いが、慶友すなはち塚のト養(初代)の句がかなり多い。讀人不知の作にて(卷五)

長崎へまかりてくるふねの入るる年に  
雲のかゝる月や黒舟空の海

の句、慶友の句(卷十五)に「蜜も皆まつ黒方に打けぶり」の前句に、

南蠻舟にたばこをやのむ

と附け、おなじく(卷十七)「白き物こそ黒くなりけれ」に對して、

まかい糸を南蠻舟に賣はて

とよんだのがある。編者重頼が「忍びくにかたる上瑠璃」に、

らう人や世界の圖をば知ぬらん

と附けた句中の世界の圖といふ語は徳川初期の流行言葉で、遡れば海外交通時代の盛期に及ぶのであるが、日本西教史を見てもわかるごとく信長や秀吉が世界圖を按じたこと、家康が世界圖の枕屏風を駿府の城中にもつてゐたこと等の事實と思ひあはすべきであらう。下つては寛文年間のト養狂歌集中にも二首もよまれてゐるのを見かける。

よきといひて類ひもいさやしらひげを  
これぞ南方ぬくせかいの圖

それには「ある人南方の毛抜を給はり氣に入らば歌よみておこせとありければ」と題詞がある。南方けぬきことは既に毛吹草にも出てゐる。ト養はまた

吹風呂のてんと其いきそれすいた

せかいの圖ちやと名を右衛門殿

とよんだ。同集秋の部の或る一首の題に、「何れにても譽る詞を世界の鐵砲洲といひ侍りければ云々」と見えるが如く、もはや日本一や天下第一や三國一では譽めことがきかなくなつたところが面白いのである。西鶴も一代男卷四にこの語をつかつたが、別段の成語としてではないらしい。

貞徳の油槽は寛永二十年の刊行であるが「おれすまがらすとほらざりけり」の前句に附けた五句のうち、

委になし南蠻人の劍のかね

と南蠻鐵をきかせたところは日本の近世刀劍史にも一つの資料にもならうか。同じ年の淀川すなはち新增筑波集には、タバコの句にその註が添へて出てゐるのは、珍しくないが「琉球國はらくなあきなひ」といふ句をよんで、「まうくる又まうくるも女子にて」といふ句につけてゐる。琉球の句は鷹筑波や紅梅千句に一句づゝみえてゐる。正章千句に蝦夷の句が二三句出てゐるのと呼應するわけである。貞室の正章千句すなはち千句獨吟之俳諧は貞徳を判者として正保四年に成り慶安元年刊行であるが、それには私の愛誦する連句があるから左に引く。

かたきもつ身など弓斷なる

黒船はをげれす舟のあひ近み

俄に風のかはる洋中

みんなみの空に陰氣な雲たちて



覆ひきさるや補陀樂の山  
慶長元和のころ葡萄牙西班牙の黒船が新來の阿蘭陀英吉利の船を海賊船としてかたきのやうにしたのは異國日記や外蕃通書などによつてうかゞはれ、セイリスの日誌等にも明記してあるので、當時の列強が東海南洋に角逐しつゝあつた模様を示すばかりでなく、末の三句の如きは日本の海洋詩では異彩を放つものと思ふ。

枕上の時鷄に夢をさまされて  
南蠻人の月をみるさま

冷しとせいたかをとこ笠をとり

との附けかたは蕉風の方から見ればともかく南蠻趣味からいへば感興味が深い。明暦元年刊行の紅梅千句にも同趣の句は應接に暇ないほどである。時計、ビイドロ、鐵砲、石火矢、それらはさておき、

のぼりぬる糸巻物に利の有て 安靜

繁昌しける長崎の町 友仙

戸さゝざる世ぞ下の關かみの關 季吟

の如き連句は貿易史の裏書となる。鯨の句も貞派には多いが、こゝには略さう。

寛永十五年貞徳の判がある西武の鷹筑波は同十九年の開板であるが、それにも同様の句があまた見えるが、正章千句の英吉利船と南蠻船との對抗がこゝにも亦反映してゐるのに氣がつく。

すはやかたきとさわぐ船中

ひつくはへ矢をいぎりすやこはからん

吉利支丹の句もこの集に出てゐる。

功德はいづれ法華念佛

吉利支丹ころばんとての談合に

尾もひれもひんとはねたる魚をみて

それより古くは犬子集の卷十四に、「あぐる柱はころびさうなり」の句につけて

はた物となすだいうすに異見して

とあるは磔刑に處せられた提字子宗すなはち吉利支丹の師徒に異見して轉宗せよと迫るところである。油糟のうちにも、

逆もしなばいかでか腹を切らざらん

江戸せめにあふ武士のていうす

とあるのも、吉利支丹の武士が切腹を背ぜぬことをよんだのである。寛永正保頃の刊行といふ仁勢物語に、

をかし男ありけり、きりしたんの御法度ありて、むさし野へつれて行ほどに、とが人なれば町奉行にからめられにけり、女も男もくさむらのなかにおきて火つけんとす、女わびて

むさし野はけふはなやきを淺草や

つまでもころべり我もころべり

とよみけるを聞て夫婦ながらたすけてはなちけり、

とあるのも、江戸の邪宗退治のありさまを滑稽化して寫しておもしろい。淺草に邪徒を處刑したことは記録にも出てゐる所である。

貞徳が尉草卷八に於て、六時禮讃の由來に關して、評語を下した條に、

今の時代でありしだいうすばらひなどをもよくしるし置たき儀なり、末の代にいたりてかの南蠻より來りてかの法をひろめ

むに當時の御成敗をしらざる日本人めづらしく聞かれて此國をかれらがとらん事うたがひなし、心あらむ人はねん比に今ある事を書置て而々の子孫にのこさるべき儀なり、

と記しておいたのは、「吉利支丹の日本にいりたりし時は京茶牛肉をワカとがうしてもてはやせり」(卷四)と京都で牛肉を

たべた話と共に、私が既に述べたことがあるが、ワカとは葡語の Vaca で英語のビーフにあたるのである。かういふ外來語



異國俳趣記

覆ひきざるや補陀樂の山  
慶長元和のころ葡萄牙西班牙の黒船が新來の阿蘭陀英吉利の船を海賊船としてかたきのやうにしたのは異國日記や外蕃通書などによつて知れぬはれ、セイリク(シベリヤ)に上陸した

もすたれて後世にはきこえない。貞室の片言は慶安三年の編であるが、總じて南蠻言葉唐人口などは聊かも使用すべからずといふ制定などを設けて排斥し、賀留多用語なども避けるやうにしたらしい(卷二)やうである。但し重頼の毛吹草を見ると、カルタ關係の語も付合すなはち連想語句集中に加へてあるので、さう嚴しい制定が行はれるわけもない。蕉風の句にもイス即ちイスバダ(劍の葡語)がよみこまれてゐる。

毛吹草は寛永十五年正月の序があり刊行は少し後れるが、卷の三の附合の部を見ると、「流るゝ」「虫」「劍」「拾」「給」合などの語に「かるた遊び」を附合させる一例にしてあるが、その中の劍を南蠻人につけあはせてある。これは前記の油糟に一例を見出すのである。なほ毛吹草には南蠻酒や南蠻菓子が出てをり、シヤボン、マルメロ、ポブラ、チャウ、カツバナなどの如く衣食に關する外來語が散見する。貞徳文集はやはり慶安版の稀觀書であるが、それにも南蠻の事物がちらほら見えるのは不思議でない。

さて話が吉利支丹にもどるが、慶長十七年の跋のある小瀬甫庵の刊本章蒙先哲の卷七に、可樂物と題して、「邪なる法の漸うすく成行は」とあつて

病の邪氣去が如し、邪法を撥揮せんには、しゝびしほに成侍るとも、君のため民のため萬代のためならば、せめうたんに邪法おのづから薄く成なはんは、樂ても猶餘りあり。

儒學と愛國のがはよりの異端排斥の意氣ぐみさかんであるが、これを羅山の斥耶蘇の文や貞徳の慰草など、連關して面白く感ずるのである。

談林派の方でキリシタンとかバテレンとかオランダとかいふ文字を書名や流派名につかつて互に排斥しあつてゐたのは延寶年間であるが、この派の人々は紅毛の名前をつかふわりにはその事物をよみこんだことは少ない様で、貞徳派の異國的なものには遙に及ばない。世界の圖については西鶴一派にも「戀病を思へば世界の圖法師ぢや」(山本西六)などの駄洒落がある。

蕉風に於ても芭蕉自身に蘭人に關する二三の句が見えてゐるが、趣味からいへばむしろ蕉風には遠い。其角には紅毛人をつ

かまへて「紅毛來貢の品々奇なりとして」と題して、

桐の花新渡の鷓鴣ものしはす

の名吟がある。嘗ては延寶七年の江戸蛇之餅に、言水が、

いとる障子戀へだつ春

とよんだ一句は、芭蕉の

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

といふ人口に膾炙した俳句と共に載せてあるが、其角の水戸黄門の硝子の御茶屋にて

水の工み酔顔清し水茶屋

と題した瓢逸は蕪村を想はしめる。其角が元祿三年選集のたれが家に、次の連句のあるのは寧ろ珍しき。

人質かへす命うたかた

沈着耶蘇も徒徒もころぶ也

才丸

歩くるしげに恥るはら帯

才丸

嵐雪の玄峰集には、四十二國人物圖が山海經の挿繪でも見たものか、題詞の長いのをそへて

紀の山紀の海にいり江に入る、禹益の水を治めて異物をしるせる海外山表のありさま、ルスン、カボチャなどいふ遠津島の人からは畫にのみ見たり、南のえびすの洞にかくれ、いはほに走るを鬼にもせよ人にもせよ、こゝろおかるゝ旅寝なり、

蛇いちご半弓提げて夫婦づれ

の面白い句がある。去來に至つては、長崎には縁故深きにもかゝはらず、異國情趣の句は殆どないといつてよい位である。長崎の丸山にて、「いなづまやどの傾城とかり枕」と去來發句集のみならず、俗風文選にも後丸山賦を添へて載せてある名句は

あるけれど、異國ものをあしらつたのにはカルタに關する俳句に  
手一杯ユスのカルタや脚躑躅山

異國俳趣記



覆ひきざるや補陀樂の山  
慶長元和のころ葡萄牙西班牙の黒船が新來の阿蘭陀英吉利の船を海賊船としてかたきのやうにしたのは異國日記や外蕃通書  
異國俳趣記

といふ赤い色にてあらはしてある劍の形すなはちイスバダをよんだものがあるにすぎない。卯七の渡鳥集にも卯七の千句  
興行に

錦積む町も奥あり里神樂

といふ妙にひねつた所を吟じたのが私の眼についたくらゐである。然し去來が元祿三年長崎にあこがれ卯七を夢みて、「こ  
れより南にゆく心せちにしたり」とて、

長崎のながきも訪はん雲霞

と吟じたといふことであるが、私はこの一篇の眞偽に多少の疑はもちつゝも、それを録せるいはゆる去來文なるものは愛  
誦しておかないのである。南國の郷土に憧憬したあの意氣はうれしくてたまらぬ。

天明時代の句にも異國情趣のたゞよふものがないではない。召波の春泥句選にこんなのがある。蘭船の歸帆を吟じたので  
ある。

石火矢に出行船や霧のひま

大江丸の俳懺悔にも同趣の句がある。

石火矢に船出す春の行くへ哉

春と秋との相違ではあるが、詩作はとにかく、事實からいへば秋の方がかなふわけである。大江丸が肥島に對して、

桐ちるやみぬ唐土の鳥はみせ

とよんだのは、其角が桐の花に新渡のあうむをあしらつたのに比べてどうか。蕪村等が安永二年の歌仙に、

ともづなは只かりそめに結ぶらん

月おぼろなる紅毛の顔

散華を案じく寝てしまひ

春やむかしのふるさとの味噌

几童  
一音  
春堂  
蕪村

前二句はやはり召波や大江丸の俳句と同工で歸航の蘭船をうたつたものである。すでに延寶の長崎土産に「早きもの一品々」とあつて、その中に阿蘭陀の歸帆がある。惜まれたにちがひはない。「あすは船出る何とせうぞの」など、松の葉に見えてゐる情致はどこでもかかはらないものだ。たゞし加賀の樗麻麥水が明和安永年中出島の蘭館に宴して七月十五日の月を賞して、

いざたまへ冢名月と興すべき

の句を發したは少しふざけてゐる。詞書はかうである。

長崎に遊びし日、故ありて紅毛館に入る、出島の臺にヘトルの役アルメナナルトと宴する事ありて、其日は文月の十五日也、宵の月甚だ明かなりし、

ヘトルは葡語、torで甲比丹の下役、Armenault は明和安永の交在任した人で、進んで甲比丹ともなつて、事蹟もこのつてゐたかとおぼえてゐる。

何で見たか忘れたが寛政十年春の刻本に阿蘭陀鏡といふ俳書がある様であるが、俳諧書籍目録にも載つてゐないから他日調べてみようと思ふ。延寶年中の阿蘭陀丸二番船などといふのと趣を異にしてゐるにちがひない。



○ブラクあるきび 物 せぬあやうびいろく 感 するこことか  
ある婦人持の今が西洋式のものふひとく行のんひ  
すめた、今までものき尖がちくつき出してあるた  
杖のこことくつく式ひ男世用も同様ひあつたが  
此頃のの先きに一寸あるひ出で、その位で土につけ  
すきは折く 日 さうさうとある、初めは見たころん  
おうく感したか、あ、目、増んてえさを 地 方、の、ま  
やうな思ふ、今を杖のこことく出、つきまて、ある  
くのもおちあつた、いせこり 日 かるくと 折 り  
帯もあつた、か世用の 日 としとあつた、い  
と思ふ、又婦人の若いものが洋装をつけたこと  
が可なり、行のんを来たか、 日 近の短から割入る

はねてある、あ、何となく目よつといへ 日 ともとてます  
たまにハッ 日 リと去靴下をすたりとつけ  
ぬ定のまのまのきいのをえとよの 日 気持ふ  
す、中 日 海 日 上の婦人かスカートを用ひること  
が益に盛ん、さうとせきと、行のんのちと白昼をあら  
ハすこと、無くさうと一程日本婦人の美を没却  
し 日 氣味 日 ハ 日 みる 日 け 日 とも、婦人が 日 閑 日 楽 日 する 日 こ 日 こと 日 なる  
る 日 ち 日 の 日 陰 日 伏 日 せ 日 あり、三 日 城 日 白 日 木 日 の 日 こと 日 大 日 改 日 働  
の 日 吳 日 袴 日 店 日 が 日 毎 日 日 日 除 日 の 日 結 日 果 日 三 日 お 日 と 日 ち 日 へ  
きる 日 陰 日 毛 日 が 日 二 日 三 日 握 日 七 日 出 日 と 日 い 日 男 日 女 日 何 日 の 日 ち 日 へ  
七 日 折 日 し 日 か 日 好 日 る 日 ち 日 お 日 喜 日 る 日 男 日 の 日 洋 日 装 日 を 日 着  
し 日 ち 日 若 日 さ 日 う 日 る 日 多 日 く 日 ハ 日 甘 日 マ 日 シ 日 ヤ 日 後 日 白 日 昇 日 福 日 を 日 つ 日 け











たゝみ無つた。○朝吹の信を伝へると、意初思ひ三  
つに決末亡人セまじ。命せあつたが、お供に及ぶ  
と、未亡人の頭を左に振うおひらき、さういふ  
人、○烈おひきき、はたし、人、何を書きここと  
かあり、まうさういふ、まゐり、夜合のことも書きつて  
ですかといふに、味さす、未亡人の良人親も西各  
ろい、朝吹と無量の友人、深山あふが、笑ひ未亡人が  
皮肉に云つたや、夜合のまじり、親つてゐるよ  
か、まじりの、まじり、材料とと集の廻り、まじり  
の友人、僕の材料、附録の方、四ハ、い、笑ひ  
といふ向かまかつた、読つて笑ひ、えん、大巻の  
右、四谷位、橋所、の、芝、屋、の、附、録、に、あ、る、例

の音調ホテんを、ゆり、ライトの設計、わあ、から、大  
要、似、あ、り、の、ゆ、り、を、日本、室、の、天井、も、あ、り、低、く、読、を  
歴、を、ま、じ、り、心、地、が、ま、じ、り、屋、振、家、の、早、上、に、印  
刷、に、ゆ、り、と、端、書、が、ま、じ、り、い、て、あ、る、か、ら、何、を、見  
ると、僕、も、ま、じ、り、マ、キ、マ、キ、手、帳、自、在、な、ま、じ、り  
押、書、も、ま、じ、り、出来、の、ま、じ、り、新、り、も、あ、り、ゆ、り、七月、十  
日記

○赤染坂の松枝といふ家から、頼ま、え、ゆ、り、酒  
酒、長、春、の、大、字、を、書、き、ゆ、り、ま、じ、り、三、階、の、本、を、あ、り、  
不、熟、と、し、て、揚、げ、ゆ、り、い、て、ゐ、る、こ、と、ま、じ、り、か、ら、ま、じ、り、の、類、の  
下、に、一、杯、を、傾、け、ゆ、り、ま、じ、り、時、ま、じ、り、出、ら、う、け、て、あ、り、  
を、強、い、ゆ、り、人、や、校、書、を、呼、ん、だ、ま、じ、り、未、亡、人、ま、じ、り、年、間、が



元来無聊を遣ふ事の如く世中を打平し床  
の飾り付が亂脈が氣が合はぬからおんが直  
しとやると花子やらつ豆物やら料紙お研共  
文甚まきとも高の地位に高きやうと体裁を  
有りたるつた世中、是れ他も高き御免とさいと  
いふからよきとされと其の事の内、位かをも冬を元  
るなどこ七か、こ七飾り物も淨いあまが、豆物  
が赤と得るのいふは悪氣を鼻を突のり片ハレか  
ら其しと終に十式家といふよきこととく、年入  
をしと漸やく氣が合はぬ人、此の手入のせよ、秘の  
まか一晩し、此の一日、其のあつた、彼は時を移し、やう  
と酒敵七枚者も未席し、此の、特に法書の之を

類に、席を設け、此の秘の御免を流し、  
しと酒をたて、こも一時の具であつた、七月十日  
記

○元寺東慶寺の事、故、是し、此の時、今、此の家、  
境、主、人の事、か、此、者、に、花、け、込、ん、び、る、た、の、を、今、此、の、  
三、か、寺、か、ら、此、の、婦、人、を、奪、え、下、した、事、を、今、此、の、  
二、出、し、た、か、ら、而、も、此、の、者、を、今、此、の、  
美、事、物、を、御、免、し、て、見、よ、い、と、ま、か、ら、う、つ、た、は、月、神、  
の、文、書、御、免、し、と、後、に、此、の、事、も、  
男、明、成、の、事、の、御、免、し、が、書、の、と、あ、る、北、人、の、御、免、し、金、貨、  
か、す、ま、か、ら、或、る、秘、の、御、免、し、と、ま、か、ら、の、金、貨、を、御、免、し、  
其、の、事、の、御、免、し、と、ま、か、ら、の、御、免、し、と、入、り、堆、積、の、金、貨、



書名を無上の樂と云ふは、野樂のハ  
況信し得ざる事其の否か、其のハ、  
の道楽と云ふは、此のハ、  
七年の秋父の嘉成の歿しにあり、  
おを記すに、此の甲斐を捧ぐ、  
家元の地主の誅戮し、  
うく、  
馬系、  
つからし、  
頃、  
名を、  
土を

副、  
ある、  
とある、  
し、  
の、  
騎を、  
い、  
の、  
狂、  
味、  
く、  
十、

古今家盛衰記の成の傳、



を集あふる時一令うし七取集あ時の人こんを如  
一分取と稱す式部一分言おしきなる由云ふか  
とある

の成い四等名を奉府く五上し七休意と名乗  
つ七浪人とさうに、後二伴のひまゆが石物安徳  
郡の僅い一帯石におおせられ

の先以五十分命の山上墓地、新嘗言又た墓の撰  
文を彼森林神海と托する三付す言又の大方の  
を叙し、人う朝美人と高きし神海を四名の  
氏に訪を托す、又案文の移左の如し  
七月十五日記

大正十四年秋五十分命寺附屬山上の墓地に存  
す三兒の墓を合せし一所に葬り埋葬せんとい  
欲し試むる地域を捨する餘地を存するこゝを  
許さるし思ふこと今に於て君等一家の墓域を  
くまあるまんの後未埋葬の所をいんといふ  
一地域を由つて移定を成し、  
木一親撰を大に相する山の左極  
端隣地の境界を接する地あるを  
乃ち石にて隔して地下に骨の室と  
作らし大正十五年春其已成り及んが先づ  
三兒の遺骨を遷す、再後吾家族  
の遺骨の爰に収めんことを期すとす



○先き元治中一突如急姓肺疾を患ふ死す人  
万の果敢あさきとあきくはくはついで北原里の  
文の胎をえんとして五粒をたに訪ひしと問ひ  
らうとらふこ今うまの葬儀を四品塚何三丁目  
長善寺に葬む北寺善を母寺といふ昔洞家  
也寄つて北寺の大人北寺に任さんし由せけと訪  
ひ今もかかぬ也昔し一都らに有ん源寺  
の二うしといふ、はるま境内唐ありし  
も是れ得る今山門の左右民家と交し  
おん、此以後の妻と遷と見へる、山つ三揚け  
る母寺し、二字の永平寺古僧の古りて  
後歎の妻千社礼に掩えん、わう難き也歎

○身時代あるものも七極めて美也ぬま  
縁因うと今、親しく訪問し得る七月  
十三日記

○今刊後森神海に今しと流重や成る家の子  
に及ぶ神海、いし、く此散るん、成る遺物を編  
纂あ、なるも也、成る家の詩又今次出版のもの  
八冊の多きう、なるも送文数冊あり、世の刊  
行を約す、云、成る家の文章を、成る家を傳  
し、い、其初め、詩を以つて、昌永、昌永、  
在る日、成る海南、君の詩大に、成る、  
海南君、河、日、君の詩人を以つて、任、  
す、乎、と成る、然、海南、果



然らば「しん」と文を以てあへしと、君にんらと文を以てあへしと、しんと文を以てあへしと、海南とて後其文才優し海南の上に出のしんと名此故を以て海南を終始敬しと、いふ、余神海に淵は大江流空舟の泊貴なる中におめあやと問ふ、曰くあり、其秋懐二十律の如きち屋るゑの表く及心さるゑと稱す、成宗の初めしと又三原の人と思へしと、しんと文也  
 (七月十三日記)

○又同者を通り四五程を得た (七月十三日記)

- 一 生入福兵衛幸 高橋伝
- 一時花分 鶴屋宗曾我 唐来三和
- 一間合仍物 蟹川冬 ちり龍心

以上の黄表紙より表紙七所満迄あり

一 而月物語 東橋伝 四冊

あ承原撰の秋風の北物語今得ること難し此者物しとへし亦二冊を願ふ

一 元寛見日記 二冊

元和元年より元寛永十四年とあり徳川氏の大事件録、時代あるを以て元寛阿波四文庫の印記あり元代に撰の舊巻をもちこと知ふし、此由に二冊目の大改綴りことあり福崎三則



かおと別かき詳細の記ありあ  
地にある匠は其の命にあきせんか  
と渡さすと祝するあきあき  
りう、別とて面白かん、

一 馬性小書

一冊

依人の匡北郎士撰編する所文化  
八年刊行馬の性より五種に類別  
し漢名に和譯を施し且つ其の性  
を注す寸珍也、小指廬の寸  
本部に揮筆すし

一 江戸回正方鑑

一折

元禄六年刊 温清軒の撰述あり

東叡山流大名宿坊（其他を削去）収  
た大名上層（中下層）の

一 江戸大拾遺

一折

享保三年刊 享保二年に江戸大火あ  
り此回ハ復興版なること書体須原  
屋の撰述あり

一 奥の細道

拾入

三冊

此書の拾入地ニカあり、二入ハ香雪  
文山の畫を挿し字ニありて巻首  
ニ乙二の序あり巻尾ニ標宗  
庵ニ麻呂の跋あり、此序珍なり  
あり



○今接手し以日本及日本人の革命の爲人奥平海  
 輔の續行記のつゝを以て、漢文に及ぶ。新居の妓  
 阿一を以て、北越の阿一がある、其の行を以て、奥平の  
 家へ侍つてゐるといふ、其の事もあつた、この  
 漢文を以て、北越の阿一と友坂の北越の阿一と、  
 ん、今も花を以て、奥平の阿一と、北越の阿一と、  
 平昔の阿一年、遠く、今もあつた、おもしろ  
 公家へ、扱ひさるゝ幅を、即ち、北越の阿一と、  
 珍しく、印が二顆あり、北越の阿一と、  
 こと此の日本人所載の阿一と、奥平の阿一と、  
 と、阿一の阿一と、北越の阿一と、  
 から、阿一の阿一と、北越の阿一と、

以て其悶々の情を見る可しである、或は文章の士、屬吏の雅  
 韻を解する者を招き、詩、酒、碁、劍を談じ、終宵寝なかつ  
 たこともあるだらう、就中酒と詩は、最も彼の好む所であつ  
 た、而して女色は如何、美人は如何、記者不幸にして、それ  
 を記するの材料に乏しい、が、謙輔といへども決して木の股  
 から生れた人間で無い、否彼は多感多情を生命とする詩人で  
 ある、今、奥平家に珍藏せる一幅の文、墨痕龍の如く、自づ  
 から風情露心紙面に溢るゝを見る、越後新潟の妓女阿一を頌  
 したものである。

妓高。新。馮。之。産。也。姿。容。絶。世。真。操。無。比。萬。乘。之。主。  
 傾。其。國。以。購。之。死。守。不。動。是。不。爲。利。疚。白。刃。以。脅。之。  
 守。節。不。屈。是。不。爲。威。惕。也。既。潔。既。勇。是。不。亦。女。中。之。大。丈。  
 夫。乎。吾。聞。之。君。子。之。澤。百。世。不。斷。其。流。風。餘。烈。被。及。  
 於。青。樓。者。必。有。存。于。今。者。矣。戊。辰。之。秋。予。從。軍。北。征。自。  
 柏。崎。航。海。侵。新。潟。橫。梁。之。餘。上。青。樓。飲。焉。操。絲。竹。于。坐。者。  
 二。十。餘。人。肌。肉。玉。雪。髮。漆。黑。其。姿。容。是。無。一。二。彷彿。于。高。雄。  
 者。哉。然。而。貞。則。吾。不。知。也。於。是。乎。慨。然。曰。所。謂。君。子。之。澤。  
 固。不。足。信。之。流。風。餘。烈。果。安。在。哉。既。而。新。潟。爲。開。港。之。場。  
 夷。館。築。焉。彼。與。我。既。有。人。禽。之。別。而。又。其。爲。利。若。威。威。且。惕。  
 之。者。豈。持。義。者。所。謂。萬。乘。主。之。比。哉。以。彼。其。利。與。威。昭。且。脅。  
 之。則。其。雪。肌。玉。膚。汚。穢。腥。臊。又。何。怪。焉。予。竊。爲。高。雄。悲。  
 之。越。明。年。已。已。妓。阿。一。介。友。人。伊。藤。退。藏。求。予。書。予。  
 書。不。下。晋。人。豈。爲。一。妓。人。揮。筆。哉。不。許。既。而。又。寄。書。遠。藤。

七。郎。曰。聞。新。潟。爲。開。港。之。地。身。既。爲。妓。則。其。勢。不。得。不。唯。  
 命。吾。將。以。脫。籍。庶。哉。不。爲。彼。所。汚。乎。予。聞。而。慨。然。大。息。  
 曰。君。子。之。澤。果。不。泯。矣。流。風。餘。烈。今。猶。存。矣。高。雄。之。靈。  
 杵。乎。予。九。泉。者。如。何。哉。予。又。何。爲。阿。一。惜。一。揮。筆。哉。則。行。政。  
 之。餘。書。之。贈。之。死。者。復。生。生。者。不。慙。是。謂。之。信。況。予。未。  
 死。乎。詩。曰。白。珪。之。玷。猶。可。磨。斯。言。之。玷。不。可。爲。阿。一。阿。  
 一。勉。之。勉。之。明。治。已。已。三。月。日。參。謀。兼。佐。州。知。民。事。源。居。  
 正。題。

唯だ、露をだもいとふやまとの女郎花の意氣を愛して、こ  
 れが爲めに文を作つた、といふに過ぎないが、妓籍を脱する  
 云々に多少の曲折があるので、無からうか、奥平家に一女子  
 の寫眞がある、これ謙輔が北越に於て知つた女だ、との傳は  
 のこつて居るが、それが果して阿一であるか、また果して他  
 に謙輔の馴染女が有つたのか知れて居ないとの話だ、遺族こ  
 れを知らず、他人これを知るとは、無論出来ぬ、謙輔の「北  
 地」と題する詩にこんなのがある。  
 北地佳人我亦憐。明眸皓齒小神仙。誰能留汝艶妖色。更  
 使迨吾英妙年。只覺嬌情生舞袖。不堪痴怨托彈絃。纏頭  
 一擲。擲盡。何妨呼爲太守頭。  
 此の詩は、よほど突ッ込んである、これは阿一とは別人の  
 其北征雜詩の中に、  
 經年爲客憶西歸。夢落家鄉舊釣磯。君去若逢知己問。佐  
 州太守狎輕肥。  
 此時誰復苦思家。有女顏如桃李華。假使重來春已老。東  
 風滿地落殘花。



て奥平二者を治るるも奥平ハ容も許さざるの如  
言を説けて書かせしむあると嘗て其處外から受へ  
ル、一時の者教としむじよか家になしてゐるといふ  
ハナト度也 あつて受けは法松寺の家 七月十五日記  
○此の華族分岐の文の協会の藩派会を催し海軍兵  
如の将方大あ授手賀派氏から我軍艦の現物をやき  
人言も強ふするものかあつた、世界の大戰が海軍殊に  
軍艦七六より教訓を多けり、抗撃力が道あり  
こつた防衛力も進まざるを得ぬ、防衛力を進め  
るより執り主力艦の排外水敵の大きさを得  
ぬ、砲原の威力が大きい魚雷が上から落下するを  
を防ぐより艦のデッキを厚いの鋼板でせぬ

成、今の存よさを更なる大いなる増えぬ、これ等  
ハ皆大艦を作らぬものかあつた、どうして七五  
並噸位艦を要するものと華盛於令戦び三番  
五千噸に制限し巡洋艦に備へるべきを要す  
極めることが出来ぬことあるつた、主力艦に備へる  
大砲の是れ十六インチを要し巡洋艦も八  
インチを要する、巡洋艦ハ八インチ砲を振付するハ  
七五並噸の艦に七五インチ砲を要するつた、  
斯くの如く噸数の大なる艦を要することある  
つた、これ、制限を要することあるから、あるは智力  
の働きの制限内に充分の威力を押し充分の防衛  
力がある換りせぬものかあつた、  
●高は四の三倍







航空母艦としてワシントン合議で定められた二万七千噸のものを各四隻に増強し艦を改造してこれに充用しておる。甲板上の推進が全く変更しておる。これら四隻は甲板の中央にあり、どう推進の突出ししてあるものと、全甲板平面にあるものと二種あるが後者が便利であるらしい。

○昨日坊間を漁り備うる一書を得てゆくる

一 國史本紀考 萬葉言本五冊

大戸栗田寛の有名な著述である。漢字をふまえて、えんごを萬葉の好字本に、藤原、里川春村の考注がある。久米幹文、鈴木重胤の教習記七を

ふが春村のハ殊に毒しい、別記とまゝ一冊もあつておる。流るる本と云ふもののあきあきかまれば、肥前カリタのハ、これをか自本があることハ辨を待たぬ。國史本紀ハ四書、本紀中のよみか、萬葉子本紀ハ偽出と云つてゐるが、此者ハ偽者と云ふことと、古来の者ハ此説あり、而してさう考証ハ粟田のものを冠冕とす。

七月十六日記

○高土山麓に大公園を作るの議ハ昨年や、具体的にどうして其際関係技術ハ廿四の公園を調査して此の工場の設計に及んば、其際の記々の大案ハ此の

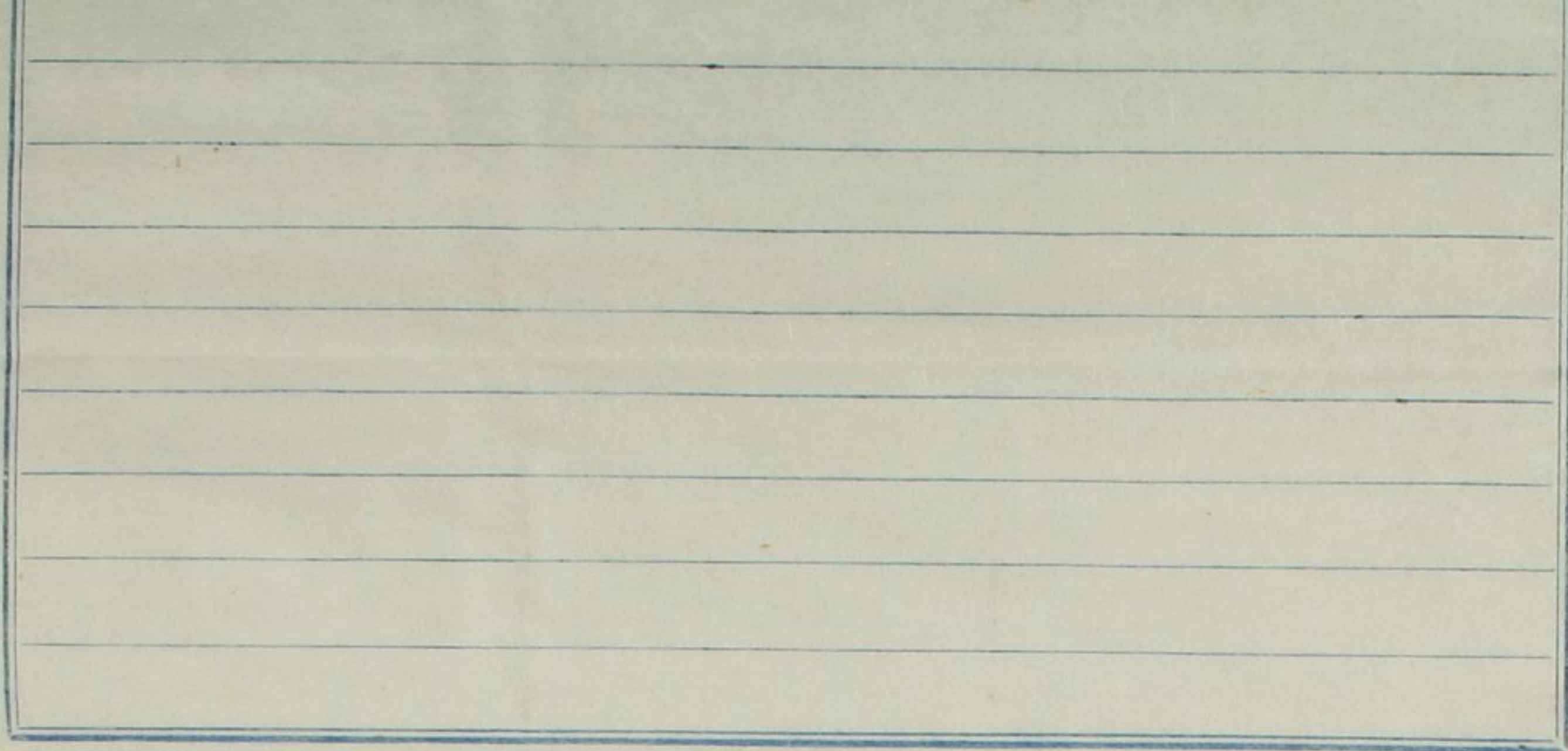












十二行





### 會社の目的

富士山麓の雄大な景觀は事新しく吹聴する迄もな  
く先年攝政宮殿下の御巡遊に依り此大自然に對する國民的憧憬を一層旺盛ならし  
むるに至りたるは國民の保健並に教化の上に鑑み寔に欣幸する處なり、同地は  
海拔三千五百尺の高原にある磐岩地帯にして空氣乾燥清澄、保健上申分なき別天  
地たるのみならず、山麓を繞りて點出せる、山中、河口、西、精進、本  
栖の五個の湖水は宛さして太古の靜寂を偲ばしめ、千年の姿態を競ふ青  
木ヶ原の大森林は古來樹海の名に依りて其神秘的壯觀を想はしむ、然か  
も春は満目の新緑に映じて躑躅、馬酔木、石楠、富士櫻などの咲亂れた  
る岳麓特有の風趣あり、夏は富士登山五湖廻りの外高原、湖畔、林間の  
生活又は湖水の舟遊に、秋は紅葉と千草の觀賞に、冬は三ヶ月に亘り結  
氷する山中、河口、精進三湖上のスケート、或は山麓一帯の痛快無比な  
るスキーに、四季夫々の興趣擧げて數ふべくも非ず、殊に精進湖の如き  
は今を距る三十年前一英國人の發見する處となり、此處にホテルを建設  
し、我々日本人の頭上を越へて遙かに海外に宣傳し來りたるが、其結果  
今日に於ては世界的勝地の重なるものとして著聞するに至り、先年英國  
皇儲殿下御來朝の御は、岳麓御巡遊の一項を英國にて作成せるプログラ  
ム中に加へられありたる如き確かに岳麓の景勝を世界的に裏書するもの  
と信す。

### 縣有地及町村有地提供

山梨縣は右兩會社の成立を助成す  
る爲め富士山麓中別莊建設に好適せる縣有地中最優勝地積三百萬坪を借  
地料一ヶ年一坪金五厘を以て永遠借地の許可を與へられ又沿線町村は共  
有地壹百萬坪を一坪三十錢の低價を以て賣渡の契約を締結せられたり。

### 建設中配當及補助

本電鐵は建設中は五厘の利息配當をな  
し又營業開始の上は大部分政府の豫定額なるを以て地方鐵道補助法の規  
定により十ヶ年間七厘に達する迄の補助を得る見込みなり。

### 富士登山と五湖巡

本電鐵の完成に依り富士登山者の利用  
する者激増すべく、又富士五湖探勝者並に修學旅行等集團的旅客の廻遊  
する者種を接するに至らん。

### 各大學の施設

本電鐵沿線には東京帝國大學、慶應大學、明  
治大學、東京高等師範、第一高等、麻布中學、實踐女學校及日本少年團  
聯盟等夫々大地積を擁して運動場、寄宿舎、講堂等の施設をなしつゝ、あ  
るが右の外商科大學、早稻田大學、日本大學、中央大學等目論見中のも  
の枚擧に遑あらず、されは將來野球、庭球、ゴルフ其他の陸上競技、水  
泳、ボートレース、スケート、スキー、山登り等全國運動競技の本場と  
して天下凝視の焦點たるべきは疑を容れざる處なり。

### 土地會社の利潤

土地會社は縣有地三百萬坪、町村有地一百  
萬坪、合計四百萬坪の提供を受け内百八十萬坪を兩會社株主拾貳萬株に  
分配し、残り二百二十萬坪を保留し適當の時機に於て相當の價格を以て  
處分し會社の利益を圖る外別莊建築の請負ホテルの經營等を爲す。

## 起業目論見書

富士山麓電氣鐵道株式會社（資本金五百萬圓）及富士山麓土地株式會社  
（資本金壹百萬圓）ハ左ノ方法ニヨリ創立スルモノトス

### 株主に對する土地の分配

會社は山中、本栖、精進、三湖  
畔及吉田、鳴澤地内の四ヶ所に於て右四百萬坪の別莊用地を占有し、之  
に水道、道路等別莊地としての必要なる施設を爲したる上、兩會社の株  
主に對し單位二十四株に付三百六十坪の割合（一株十五坪の割）にて縣  
有地は借地、町村有地は買地何れにても株主の希望に任せ原價同一條件  
にて其權利を移轉するものとす但し地所の割當は抽籤に依り尙株式四分  
ノ一金十二圓五十錢拂込済の上は右土地は隨意分離して賣買讓渡の處分  
をなす事を得べし。

### 電氣鐵道の線路

は中央線大月驛を基點として吉田に至り左  
折山中湖畔に達する二十哩及吉田より右折河口湖畔に至り更に西湖、  
精進湖、本栖湖畔を繞りて富士身延鐵道線常葉驛に連絡する二十四哩間  
に電氣鐵道を敷設し、尙第二期計劃として山中湖畔より東海道御殿場驛  
に連絡し更に電車若くは大型乗合自動車を用いて御殿場より長尾峠を経て  
箱根湖畔及強羅宮の下伊豆半島にまで連絡を圖るものとす。

### 帝都より三時間にて達す

第一期線完成の曉は東京より富  
士山麓に至る所要時間は中央線電化後は僅かに三時間なるが帝都より所  
の如き短時間を用いて斯る大自然の神秘境に到達するを得るは世界國立公  
園中類例を見ざる處なり。

### 身延山へ最短距離

本電鐵は中央線大月驛より富士山麓の  
景勝地を經斷して富士五湖を繞りて富士身延鐵道線常葉驛（下部温泉所在  
地）に連絡するを以て東京より身延山に參詣するに最短距離の鐵道なり  
從て本鐵道は身延、甲府、御嶽、富士山麓、箱根、駿豆地方に亘り一大  
廻遊系統を完成して其中樞線となり四季を通じて利用せらるゝもの多大  
なるべし。

### 一、會社の目的

- (イ) 富士山麓電氣鐵道株式會社ハ資本金五百萬圓ヲ以テ左ノ順序ニ依リ電氣鐵  
道ヲ敷設シ運輸業ヲ營ムモノトス  
中央線大月驛ヲ起點トシ吉田ニ至ル十五哩八鎖間及吉田ヨリ山中湖畔ニ至  
ル五哩二十鎖間、吉田ヨリ河口、鳴澤、精進ヲ經テ本栖湖畔ニ至ル十五哩  
間及本栖湖畔ヨリ富士身延鐵道線常葉驛ニ至ル九哩二十鎖間、合計四十四  
哩四十八鎖間、此建設費金五百萬圓也
- (ロ) 富士山麓土地株式會社ハ資本金壹百萬圓ニシテ左ノ業務ヲ營ムモノトス  
一、富士山麓ニ於テ土地所有、賣買、讓渡、貸借等  
一、旅館及各種運動場娛樂場ノ施設經營等  
一、土木建築ニ關スル請負  
一、以上各項ニ附帶スル一切ノ業務

### 二、株式募集の方法

- (イ) 富士山麓電鐵、富士山麓土地兩會社ノ株式ハ壹株金五拾圓トシ電鐵會社ハ資







るへ、或る時代を譯すんも今を譯すんも  
数かあり、いから圖書館に備へるも必  
事免ら得難いよむか、是れが甚し  
しとせし工工ト改むと東洋文庫ハ特別  
書館に所蔵せらるゝ、此れ他の大圖書  
館に所蔵せらるゝ、此れ他の大圖書  
二部七出来り、備つたり、道花内府の外  
ハ無い、佛書の内も、其の形も、  
ハ字、其の形も、其の形も、  
無論四巻全書の言、一部七日を無  
料、其の形も、其の形も、  
略し、備へると云へば、其の形も、  
圖書館に

松を甚し、其の形も、其の形も、  
圖書館に、其の形も、其の形も、  
か、其の形も、其の形も、  
不急の、其の形も、其の形も、  
購入を、其の形も、其の形も、  
あるが、其の形も、其の形も、  
解釋が、其の形も、其の形も、  
入ぬ、其の形も、其の形も、  
圖書館に、其の形も、其の形も、  
あり、其の形も、其の形も、  
心、其の形も、其の形も、  
其の形も、其の形も、其の形も、



こと、事実は、各社の既報（世界中のよみかき）  
日本各時代のよみ（郵便切手、ポスター）等の如き、  
こゝを尚物故に譲るべき、あるある人物の肖像  
ありある、その原因のこゝを物故に実用するに、  
ハ設法を結ぶべきや、言ふべきあり、何んと言ふても  
固執を強ひつるべき、あるある、こゝに、  
備へる以外決して多くは、備へておくれ、  
七を、を固執を強ひつるべき、行くべき、無、固執  
ハ之れ、就て多くある、  
芝居紙、其の蒐集、  
そのものを、  
自らの実用を、  
十二行

は、保つべきのよみ、  
上海のこゝ、日本の固執、  
重のよみ、  
解物、  
集家、  
や、こゝ、  
つて、  
七文庫、  
た、  
言、  
既、

上海のこゝ、日本の固執、  
重のよみ、  
解物、  
集家、  
や、こゝ、  
つて、  
七文庫、  
た、  
言、  
既、







の原をやは花書に幅を依ひる目か来  
ること思ひるいかに切めて後書にぬ言  
本名流の書書にのち切る子上代の  
注家の歌切をとも冬代のもか  
圖書に幅のさうさうといふ書簡  
のことに刻念に原書を多く集  
め得るよめあふし法帖(拓本  
や刻本のこと)他(おこいふこと)  
ハ(奥書のよめいふ)や(画)紙(紙)や  
紙(紙)をよめし決して(價)の高め  
びさうして、圖書に重なる  
よめよめあふるに一概に書書

部類をよめから他の價のよめい  
ち(画)とせ、圖書に除外さ  
んてよめるよめあふ、(信)書(紙)他  
類(散)の墨蹟の如き(得)よめ(得)よめ  
んハ(四)寶(若)くハ(名)家の(秘)巻の  
寄(托)をよめ(け)て(右)圖書に(危)し  
といふよめ

中二類ハ金石部類ハ印譜や拓本類ハある  
かこい七(從)来(金)石(部)類(の)書(門)家  
若くハ(金)石(部)類(の)書(門)家(に)委(任)ら  
れ(て)お(れ)る(よ)め(あ)ふ、(以)論(多)少  
ハ(印)譜(や)拓(本)や(目)録(本)の(墨)帖



ハあるとして、その名の学一、概してす  
し、と云ふ和漢に通じ、著るゝ印  
語が揃つてゐる、因方、然らざる、  
本らど、七日本の、振本、け、を、  
二教の、多い、よ、比、が、友、那、の、  
と、更、う、ま、く、り、来、友、那、の、交、  
か、い、け、を、更、う、一、層、ま、く、  
き、と、こ、ん、考、ハ、  
冬、考、は、う、る、ま、の、決、し、  
の上、つ、又、い、ら、る、い、此、一、類、  
：教、を、集、め、た、も、多、く、の、  
を、要、す、る、む、さ、る、  
十二行

才三類

の上から除かてゐる、一つの  
理由、その、振本の上、にも、ある、が  
取扱、か、面、倒、が、一、面、碑、の、大、き、な、  
を、い、ま、表、註、を、ぬ、ば、ら、う、ま、  
の、数、も、う、と、置、け、る、も、困、る、  
自然、除、外、す、る、の、む、さ、  
ハ、花、柳、園、に、属、す、る、も、の、こ、ん、  
教、を、定、ま、す、と、い、ふ、地、か、  
除、外、と、い、ふ、の、あ、る、  
者、記、も、あ、る、と、い、ふ、  
と、特、殊、の、研、究、家、の、  
を、許、さ、ん、て、  
此、部、類、



くの浮世傳がある、是れは凡俗の志  
料に属するものが多い、如く(七)  
根柢のよむかまへ、花柳のよむと  
まゝのち一概に根柢かと見做す  
べきにせらる、花柳のよむかまへは多  
くの落書術や文字の巧みは此部  
類に属し、今ハ文藝大切な材  
料とせらるゝのである、固ち終の  
創始時代たる儒教の思想  
に支配せられて不潔のよむかまへ  
まゝのちの(八)集あめい時集  
のよむかまへは、今ハ後悔

才四類

花書術に属するもの、(九)落書  
術の多般がある、各々(十)つき  
秘伝の口傳や秘傳ともがある、  
平曲の譜の、狂言の仕付や  
能、(十一)落書の各流の圖である、  
いさゝか

花書術に属するもの、(九)落書  
術の多般がある、各々(十)つき  
秘伝の口傳や秘傳ともがある、  
平曲の譜の、狂言の仕付や  
能、(十一)落書の各流の圖である、



その家のよきとせし除かせる徳  
川時代の容易に手に入る難  
いものあるはかへうに集める心  
をこめぬは難くはうの  
是から割るは此のうを後者  
後者もせん心は性も脚も汗  
判じもあう、浄瑠璃もあ  
り候也、日種もあうか、後前  
えん著、野年のものと視え  
るとこの國者故も除かぬさ  
れとあう中しよひとり早大の  
國者故も北道の好内道也

があふのむ、割合に集つてあふ  
せん、就て早大のものと以  
つて國者故の一目特徴と  
すべしと目論んかぬる位にあ  
ふか、之れを國者故から除  
外するからさること、いふは表  
もあふ、

才五款

假令、雅類といふ、新文の産生も  
出す者、底より出の國者故も  
寓目を避けてあふ、よかあふ、  
是へ多く私版び、是れを主  
とせ、或は好むもの、見え、或は



紀念の増え出版するところの所  
謂る配り本と稱するところの  
ある。北都類考を以て言ふに珍奇  
のものがある。出版者も偶々  
圖書館に寄附するところの  
小絶大に圖書館に入らざるもの  
あり。紀念圖書の編纂は人の  
詩文や和歌俳句を多く上版  
するものあり。類考の多いもの  
である。圖書館に寄附するもの  
邦産のものも少なくない。その  
故に任教科として保存してや

に輸入するものもある。出版  
者も心付つて圖書館に寄附する  
ものも少なくない。近年は現紙  
料と云つて仕向ふものがある。  
今もそのものを多く遺存し、  
その詩人や文章家が、  
衡小の見る書畫帖を以て、  
て又人見の徳を以て、  
として出し、  
くある。この書も書畫に  
よるとして圖書館に取上げ  
てある。偶々あるもの



混七字の附を交ければ源因  
ひあふか此中よりいさうく教味  
のあふまふある。

更なる此部類の内し取扱う  
いづれ國者録に在るんまのま  
かいくらもある。自今か集めれ  
豆本寸珍本の如きまの國者  
録に在る極めを面倒に感  
七のあふか、字の附かあつても  
彼より教をいふあふ決し  
ぬんは難かよふまふ。

断簡零墨七夫殊く教に地

や保あの手教かあつる。此の  
黄表紙を里本をむの  
谷川の繪代紙のあつても  
んも集めて置けばは意の  
後まつともあふか、厄介  
あるはえはあふ家の集  
二巻あつても、一枚摺り  
の程々の者付やあつても  
るの類七面倒の如き其  
道の好る家目の集集に在  
し其集めれば保れ國の  
破り入るとえを







解するに誤つたこと、此誤が如何にいろいろの  
所存者をして國者彼と無縁と思はしめる、國者彼  
に不利益を生ずること少くも無い、私に對する富  
豪への國者彼を拒するの念がある、月並にどの國  
者彼にもある物、そのを集めることをせず、善道  
國者彼に無いものは國者彼が有力な關係に力の及びぬ  
こと、そのを備へ特殊の國者彼を拒するべしと主張し  
たことがある、東洋文庫に在る、北意味に於ける特殊  
國者彼にあり、若し此種のものは追々出来るとするんば  
茲に今業が成立して大國者彼の缺點もこれに補  
はれるから、大國者彼も強て蒐集區域を擴げず  
滿ちることもある、一國者彼の蒐集能を望むこと

ハ到底不可能でも多くの特殊國者彼が起る、蒐集能  
を綜合して初めを蒐集能に庶幾いふものが出来  
たのである  
七月十八日  
○漫話の初年一と春陽を記す  
○卷首の序ハ余ハ撰者ト云ふことあり、  
○其の思ひつきが、今期閉を済し業を  
○り出籍日の福を必り、おもしろく、こ  
○を初行ともし、改心を記す

七月廿日記



明治初年のこと、最早や昔し語りと云つた元  
年から指を屈しては、一世紀と云ふことが  
り年数が剩つてゐる。是れも、明治六十年  
輩の人で、是れは明治初年の日本を目的とす  
ておらぬ、二十五年輩の人、是れは、  
理解する、  
生れた計りもあるから、理解する、  
七十年輩の人、  
別々ぬ、  
—語りと云ふ、  
明治初年の文献を志きう、英集

す。人が、新聞雑誌、  
是れが最早、  
—と、  
此れは、  
の、  
熱を起し、  
く、  
何れの、  
—と、  
也、  
事、  
ハ打破の歴史、



七あんの  
の歴史がもし波瀾の歴史があるならば、軋轢七あんの  
衝突七あんの幾多の誤解に新舊の間に起る  
往々流血の惨を見れば幾多の犠牲を生ずるかや  
であるか、そこに興味もあるのか、我的に維新七長  
い間の巴お建制度を打破し、貴族府と西洋の文  
物を輸入に取り入れ、文明を習得を一番に改めん  
とする急進 **中華革命** 運動の勿論一革命  
である、日本の歴史に類例のない大革命がある事  
が急進である、新四の間に波瀾の衝  
軋轢衝突七あんの激しく、内亂や暗殺や若り  
の起り、大勢の定まるまで、悲劇が多かつた、  
舊を破り新を築く何事か七あんの金と雲し七あんの金八無

つに新よりきを長くふとの西洋の模倣に偏したか  
る模倣に未熟なあり、餘りる四物打破に急む  
あつたが、存するべきものも打破して他日弊を  
咄むの悔もある、此の混沌たる時、外交事件が頻  
発し、常路者、非なる困人、百般の更改、朝廷  
から市井まで、物産から風俗に及ぶまで、何  
れ彼七面目を一新見とする大更革の混沌たる  
何れの革命にもあること、六二へ、異業の文物を  
輸入することであつたか、其の混沌たる一箇甚し  
かつた取入るべき新文物、直る咀嚼せんが難  
物と保用する場合、木の竹を擡ぐの趣がある、  
新舊の折入るべき、滑秋を百出して歎く長観



と呈した。よが革命後何んの四子例とあること  
であるが、我々の維新は北条のことが、<sup>殊に</sup>豊  
平の之れを興味<sup>増す</sup>は、革命史中の歴史巻が  
あるか、知れぬ。

新舊軍物の杆格不調和、新史料の不理解、模倣  
の出来損ない、應用の不手際、および北条か  
ら起り来る日、捧腹絶倒の滑稽さ、當時、北  
条、真面目の沙汰として、今に於てこそ滑稽さ  
と感し、笑を禁し得ざるの<sup>○</sup>ことを考ると、史料  
といふもの時を隔て、味はさぬが、ぬいさぬもの  
か、比感せしむる、當時混亂の渦中にあるこ  
ろ歴史を書かんとするもの、誰れか、後、滑稽さとする

るものを可笑しき事と為るや、其際、筆を取  
る人亦滑稽さの中の人入る、自ら氣あつて、若  
漸や進歩する後の世に較べてこそ初めおかし  
きを感し、<sup>○</sup>滑稽さをも思ふの心ある、北条  
の事實、北条のアナリドットハ革命當時の史料と  
知るの大切さ、史料のある、正面の事實、史料は必  
ずしも得難く、<sup>○</sup>ハる、側面を知るの史料は  
多くの後に依る、<sup>○</sup>切つて大切味、<sup>○</sup>ある、<sup>○</sup>  
然る、北条のアナリドットは、<sup>○</sup>抵、當時の人の目撃し  
聴き、其耳目に残つてあるもので、文献に乏しいか  
多いから、今、こんと聴き、書きし、<sup>○</sup>其、<sup>○</sup>全、<sup>○</sup>然、<sup>○</sup>極、<sup>○</sup>試、<sup>○</sup>帰、<sup>○</sup>する、<sup>○</sup>の、<sup>○</sup>重、<sup>○</sup>ん、<sup>○</sup>か、<sup>○</sup>ある、<sup>○</sup>。



を等しい三年前から十数年の同人と維持する時、  
も後、や會を設け折々今して互ひに親しくし、  
し合ひ往々、他から人も招待し、其の談話も  
聴き、時々の人を後方、馳せ、其談話を筆  
記せしめ、今より内外の談話、記ハ漸々  
堆を著して来り、政治法律社会文芸実業各  
方面の事、一聞しておろか、十の八九と側面觀  
びあつて、身新しく、興味ある事、其甚し  
多し、春陽を主人が支まらけり、是れ出版せよ  
と勧めらる、のむ、堆積の筆記、今、元  
り、十年後、そのよを約する故、其、  
刊行すること、以、標題を、漫談、初年

こゝの、漫談、其、  
の漫談、其、  
ある、其、

○戦国時代の、  
志、  
義、  
元、











































い、私か今云いんところ、五毛の流行七、旅中：簡  
た五種の色：靴きあるの感したことを言ふ  
思きあるい。

私が朝鮮：旅行したる五六年前である。朝鮮は何物  
よりも深かい感しを興へた。その例の白衣がある。夏冬  
の隔てなく、だる階段むむ白衣を着けてゐる。その白衣  
は麻で作られてゐる。麻の西洋むむ日本むむ教習洋のよのこ  
てゐる。麻のシヤツはハシカチーフむむ安儀のよのこ  
日本の上布も麻だが、よのこ安かぬよのこである。○そのむ  
鮮人が着る服もしてゐるのを見ると、教習洋むむあるかの  
感も起るが、實を云へば原始的の服装である。アン  
ナも軟か味のよい。コワバツタよのこを冬分寒を護

する。よのこも着ておる。よのこは因習の然とある所  
ある。冬は綿服の方が暖かむむある。軟かむむ  
ある。だが、鮮人の綿服を以て彼人の替へることを  
せぬと頑固に守つてゐる。日本

NO. <sup>ハシカチーフ</sup> <sup>野人</sup>  
むむ麻を用ひた。麻を軟かすむむた。よのこを  
撃つ。叩いて和らげらるる。古歌に砧の  
歌のヤもあつた。故むむある。綿布が飛ぬ  
たんで砧も不用。麻は、朝鮮むむ今尚砧を  
用ひてゐる。鮮人の餘程潔癖と見えて白衣の汚  
損をひどく嫌ふ所から、其のあ女の最も大切  
な任務は之を洗ひ清めぬ。又之を撃つ。



つと和ける事ある。●毎の四六時中、野人の家庭の仕かし  
 いらぬ故に、●京成の鐘鼓といふ街へ行く事ある  
 と、満巷白衣の人が左往右往、闊歩横行して流る。  
 夫然、白世界を現しとある。●此のしこも垢もさへ  
 清く、白の着衣をえると、不気味よく感せらる。  
 けんも、静かに彼等、何んのたえ術あり、往來しての  
 りふと、尋ねて見るも、一定の用があるむと、唯だ漫  
 歩教業してあるのみあること、●柔かしく、●下着此の所  
 相解作の●公園へ、●這入つて見ると、  
 月も白衣がえり満ち多く、惰眠を食つてゐれば、彼等  
 の多敷い、●かして抱んがゐるのみある。●衣類さへ、  
 教習か、●るを得、●ま、●野人の抱、指入流る、●其原因ハ

いさく、ちさひあううか、其着する白衣也、●抱、指を後致  
 する、●原因ハ、●思ひ、●るを得る、●る、●  
 一、●の汚損を、●馬丁のこまき、●途中、●  
 ことが、●未、●か、●衣服の汚損を、●  
 ●と、●白色、●か、●白色を、●  
 かい、●野人、●快活、●働、●此の白衣の服  
 と、●改め、●感、●此服、●  
 一家、●洗濯の奴隸と、●外、●  
 あり、  
 和、●朝鮮を、●行、●余、●鴨、●江、  
 橋、●横、●前、●着、●ん、●か、●支、●那、







此しど、北漢法... 係し赤名ニ就レハ  
高は帝女とて送く後をみる。

汽車、奉天を過りて翌日、入り北京に着し、北京飯店  
に宿す。このころ、翌朝ベランダに出て、警備の  
ハ支那の宮城、皇宮禁衛軍城、眼下に存する、  
こと、このあつた、この想像、この大規模のこのい、  
と見渡す限りが宮城区域、この廊内をこの市街である、  
皇宮の常用に属する黄禁衛軍の二色の屋瓦、  
掩え、其瓦の、青宵を凌いで、  
おひ餓迷の概があつた、北日、晴天、朝暾  
の屋瓦、映する光彩、燦爛と、眼を眩し、  
心臓、非常なる感、打たれた、北の、皇居の、規模

の、大なるこの、利権、紫微が出来ぬ、但此の、  
滞在し朝から夕へ、近自動車をも乗り回し、皇居の  
区域を出し、このことが出来き、  
し、得る心、  
が、この、大きい、  
華と呼ん、四海、  
から見て、この宮城の規模、  
足らぬ、  
なる、  
と自分、  
同時、感



2 威しんのかんをどのまの偶に民力を獲（獲）りて支那  
 を疫癘の極に達せし清朝の瘡を元中華民四の事  
 2 動搖の由もあらず、貴州にして恐るべきは最早やん  
 ひらき、和の西大位が或る東の白海軍資金を軍  
 艦とせしむるやうな第壽山の離宮日と築いた、その  
 離宮の壯大なるを見し、喜夏交と判つた、若し  
 此離宮を築くやうな申艦軍、兵をぬき、若し  
 といふは日本ハどいふあつたらんか、清廷が資を此方  
 面に投ずるも、元醒してあたらん日本ハ或は枕を  
 ちあすることか出来たらんか、知らぬ、（費）外四  
 も支那を侮ることか出来たらんか、知らぬ、（衰）亡の  
 運命の如くもするることか出来ず、（唯）黄龍の殿瓦

が燦然と舊時の盛を物語るのみならず、和ハ  
 清在中日と黄龍の瓦に振ると轉れ感慨を  
 堪へずとらへ、  
 和ハ北東から天津濟南青島を回リ、（帰）途に就  
 いた、船中、（本）と、（本）四を逐逐する、及んば、快丸  
 を林し、得無つた、三十日の旅行、（確）確々、（朝）朝鮮の山  
 2 飽き、漢々たる支那の平原に飽いた、（積）積田平を望  
 むのハ、方振心ある、（書）和ハ日本の山あり、（敷）敷してハ  
 むるが、國外から見るのハ、此時か如く、あつた、（鳴）鳴  
 呼者等の國土に何故コンナク、（支）派のあつた、（本）本  
 土に近づいて、（神）神仙の住あつた、（蓬）蓬萊のこんが、（あ）あ  
 うる、（い）いふ、（船）船中、（一）日定あり、（露）露の事、（傳）傳



一 嘉化を云ふ、和のいへる向うを云く休めよ休めよ  
 此の書其年なる祖宗の國土を嘉化不毛として  
 溜まるといふか、と快れ満を引き無事物稱を自  
 祝した。  
 曰く白曰く其衣曰く紫曰く黄曰く赤三十日  
 程特記隠に存するのよ、いへるよ、ある、依る  
 五色の旅行といふ

北稿更々其間をめぐりて地又彼の地  
 古年十月朔二夜す

七月廿七

○此の書其間をめぐりて地又彼の地を  
 一 人見其泊印譜

一 人見其泊印譜

一 冊

人見其泊印譜の即ハ元禄次の大儒  
 印譜を云ふ、一 此印譜ハ一  
 十餘冊を収む、其類を存す  
 二冊

此方其字休美譜也、其字休美也  
 二冊、其字休美氏の花記あり  
 譜紙句法を施し、其字休美也



宝篋印経卷末に朱字ありて喜保  
年宇治美喜司と自書す港  
人の手記をハ稀覯也珎とすし

一 破鬼理死端

一冊

輕駟橋其死を著し以鈴木正  
三の著するの次初年の版行、著  
者存余市時の版本ありや未  
知なり。

一 北州列女傳

二冊

花柳の伝はぬ女の志気氣を叙  
し其のうらさを傳入也刊年を利  
せんと名跡に寶典云々の語あり

十二行

恐らく寶永の版なり今ハ珎を  
とてある家ハ玩ハル

一 眞鏡説

一冊

戦後芝田彦溝口健高の稿本也  
安政丁巳初春其退隠にあとあり  
他宿晩年の稿と知る。漢文の  
稿より瀆汚民といふ人経横に  
加筆す外二三附箋あり。文意  
おもしろし。刻をあらやろしや  
未ハ知る

一 知白齋墨譜

二冊

西冷印社の印影本也瀧孫郎



藤原収荷の墨を撫して墨譜  
と伝うなりぬの永樂元年より  
道光十三年に於る名家粉本の  
よのを彙輯し二万数千巻を  
収む。此代より粉本墨の流弊  
略々見らるべし。

○和国恒通三の遺行類を全部所つたといふ早  
大中の版の武者金吾来伝、一冊の言本を出し  
て早大回者館と寄託しやるといふを見れば、通三  
がキニグリアを評しや稿本を、後て見るよ全  
部漢文の二の能まる筆久斯波著筠在長士

評とあり、南時河のを評する字を埋めたり、亦不  
巻首をえり、の次十三年七月十四日、杉根  
山中塔之澤玉之湯とあり、南時通三と  
帝大に杉をホートンと友授し、キニグリアの海鏡  
を脱き、号を若中依傳と名振り、杉を評し  
たりと名へたり、文彦の筆蹟を見れば、河内の正を  
授りたりと思ひんず、或ハラムのテールスに授り  
たりとあり、漢評とあり、亦南時漢文脈がま  
い、通三の故より、河内の評本を十二  
年前よりあるといふ、李王と著しをいつか、心  
くく、えが如く、てり、ん、歎、首、お、る、の、後、撰、の  
姓、黄、河、評、る、特、異、の、筆、波、六、梅、す、べし







と、瓢箪の用のもよと云らん。心算する形の暗さ  
よの加多く、中々竹堂や江馬天香などの若者  
一とよもあつたや、骨董に属するものあつたが  
瓢箪の教供したとか、僅に二三位しか無つた  
急須はと見えと其数ある七十もあつた如くも  
施物なるもの依憑のよよ六十の九を占め、既味  
をんじの地を掃つてさへ、僅に三司馬江漢が後を  
青いといふ一語にけし、鶴年の一語とも見れば他  
皆論するに足らざるもの、先疾が今も骨董を既  
味を聊も思はさるることか、念に物知りた、其  
各地の室のものを、標物産標本に集めたり、  
日もあつた、さへ、今も今の一と、氣の利いたよが

手を入らざるもの、一説果然なるものあつた。  
○家宛の書、おれとて、僅に存した、  
内出簡書若干、あつた、えん、大正前年、内出  
宛氏、余が蒐集の簡を獲つた後、返して手を入  
らざる也、既と書書、愛を割き、分るを、少し  
むらうの書簡、愛惜の念あつた、あつた、村山  
浦が愛印の字を取ると、さへ、愛し、  
月前の、念に、  
、として、目録の印刷、  
寺簡冬書の内容略説し、あつた、  
聊が先、  
七月廿日



# 書畫眞蹟會臨時即賣品目錄

## 特別品 尺牘

拾卷

### 一、田能村竹田

一卷

此簡日記體の文章にて兒、太一に宛てたる長卷なり安藝の宮島より赤間關、長府、小倉、肥前の佐嘉等を歴遊し終に長崎に入り鍊翁上人の許に寓居し長崎繁昌の見聞を詳叙したる稀世の名簡なり竹田を評する者は是非共一讀すべき價値を有す元と平安鳩居堂の秘藏に係りしを市島春城先生に強請せられ天下一品の評ありしものなり

### 二、橘曙覽

一卷

草深き川舎に埋没して一朝具眼の人に會し實朝以後の大歌人よと稱へられ名聲遽かに揚がつたものは橘曙覽であると春城先生をして禮讃者の一人と化せしめたる其材料は此手紙である而して此の手紙の大珍なる點は越前の宰相松平春嶽公とも申さる、大々名が乞食小屋とも見紛ふ曙覽の伏屋に來臨し親しく談話を交換し和歌の問答をした點である無頓着の曙覽も此の身に餘る光榮が嬉しかつたと見へ其時の顛末を親友某氏に書き送つたのが此手紙で此件は藝苑一夕話に詳記されて居るから併せて讀んで貰ひたい

### 三、澤庵和尚

一卷

此手紙は候文なれど説明する處正正堂々流石五百年間稀に出でし高僧の書簡に耻しからぬもので長文二通を以て一卷とし一は人生の歸趨を説き金銀珠玉の冥途の土産にあらざる所以を論し又一通は澤庵が柳生但馬守堀丹後守の如き大旦那の處に寄寓するを誹謗したる或者に對し高教を垂れたるものにて到る處警句妙語に滿ち大悟徹底の偉人に非んば言ふ能はざる金玉の名簡である

### 四、狩谷掖齋

一卷

國學の大家にして併せて漢學の大宗たるものを狩谷掖齋先生とす山梨稻川、松崎懌堂及び先生とは當時の三大學者にして何れも我國金石學者の泰斗たり三先生共に筆道に長じ就中掖齋先生の能書尤も世に傑出すと稱せられど遺蹟の傳ふるもの極めて少く偶々斷簡零篇ありと雖も多くは其女の代筆に係るものなりと云ふ此書法を説き筆道を論じたる一大雄篇にして婉々數萬言議論適格稀に見るの好文字なり書法亦典麗莊重晋漢大家の妙奥に出入し以て書道の範となすに足る宜なり本卷風に具眼者の識る所となり往年複製となりて若干識者の愛藏する所なりと云ふ

### 五、白石、南海手簡

一卷

此簡、文の内容と云ひ書體と云ひ二通共に何れも美事なる出來にて普通の俗川文と選を異にし二者共に風流韻事に關し手簡としては尤も上乘の出來なり況して白石と云ひ祇南海と云ひ遺蹟の得易からざるに於てをやである

### 六、雨森芳洲

一卷

是れ芳洲先生より桂洲に宛てし手簡二通を一卷としたるものなり文と云ひ字と云ひ何れも他に卓越せる技能を持ちながら遺蹟の稀れなるは此人である此簡色稍や黒きは難あれど尤も得難き此人の手紙としては止むを得ざる次第であるまいか

### 七、伊藤蘭岨

一卷

是れ蘭岨先生江戸初上りの紀行的手紙で親友奥田三角に宛てたる長文の卷である一ニヶ所見取圖などありて頗る珍簡である

### 八、岩崎彌太郎

一卷

是れ財界の奇傑岩崎彌太郎氏の小野義真氏に宛てたるものなり彌太郎氏は近代の人ながら割合に遺蹟の少き一人である

### 九、岡本秋暉、椿椿山

一卷

此簡は秋暉より中村丹藏に宛てたる一通と椿山より玉川宛ての一通とを合せて一卷としたるものなり何れも珍なるものである

### 十、野呂のん

一卷

介右より石鷗、敬所、聽宵の三人に宛てたる三通を一卷としたるものなり  
(附言) 市崎春城先生は現代に於ける尺牘蒐集家の先覺者にして又た所藏者の泰斗たりとは遍ねく世人の熟知する處なり以上拾卷中六卷迄は名簡中の名簡にて先生秘愛容易に人に譲らざりしものを余再三懇請して終に割受の榮を得たるものなり(秋浦手記)











耶穌教の門徒衆は曰く *God is omnipotent*  
*He is omnipotent* といふさまに上帝は万能  
 無不道は人の心のお手細工にあめつら  
 万物を千ヨク千ヨツトと、忽ち創造し  
 てのけさーやるといふ、恐る入り二豆ごまめ  
 の歯ざりり、我々人間及び七五三事、  
 一握のいんぬの、夫先きの教人ぬしハ  
 凡俗なほちんハ器用なお仁がツト、宗号具  
 うはめといハ、万能否干能、えんじや少し替  
 上るんども、百能うこいら、掛直のるい成前  
 繪画、彫刻、和漢洋字、総てに並抜ておん

せんばこそ、いつのるるか、千ヨコク千ヨツト、忽ち  
 ひきあがつた地給舟子、るんとキツイよあてごさ  
 くらがの、夫れ両全を難んするハ、人間今昔の比  
 めーさうさ、サンと堅くるーくいあまひもさうく、  
 危前外美るんハ内醜く、此月後がスラリと  
 柳に似たんハ、前かッケヤくと佛手柑面、双方  
 全此の稀るるもごごごん、此にび剣先、の  
 天帝音の動ハ、千オン、恐る入り、手際、ひ  
 ごごつて、才一あつた、く、(任我衆よま  
 いかい)才二面白くて、(女中も子持衆も  
 ごうんごさい)才三何事とさる、実意がごさふ  
 といつんカ、理多あ、の、まごさ、ご、毎い、直大地目























一洋銀二枚也

右者今般於上海表刊行仁候和譯英辭書  
二千部御買上成代銀為前渡、惟清凡  
中候然上右辭書東京府相廻、教師等へ、小  
指、正當に代價を言上るるに後銀差引成爲  
請取可候依、一言上置候如件

明治七年六月

前田弘志

第二卷第一編

智名 福澤 論 吉 著  
中上川彦次郎

官許 指 南  
民間雜誌

明治七年六月第一編

東京三田二丁目  
慶應義塾出版社  
版 藏

此書ヲ民間雜誌ト名ケ毎三四度ツ、出版ノ積ナレバ我輩  
會ノ地ニ居テ田舎民間ノ事情ヲ知ルニ由ナシ若シ田舎ニ有志  
ノ士アラハ左ノ簡條ニ付地方ニテ開見セシ次第ト事柄ニ付不  
審ナル次第ト人民ノタメニ願フ可キ次第トヲ嚴書ニ記シテ當  
社ヘ報シ給ハル可シ社ノ記者ハ諸方ノ報告ヲ參考シテコレヲ  
西洋ノ諸書ニ費シ其義ヲ意譯シテ勉メテ報告ノ旨ニ答フヘシ  
○第一 農業牧畜養蠶製茶等其地方ニ付利害得失如何○第二 地

民間雜誌











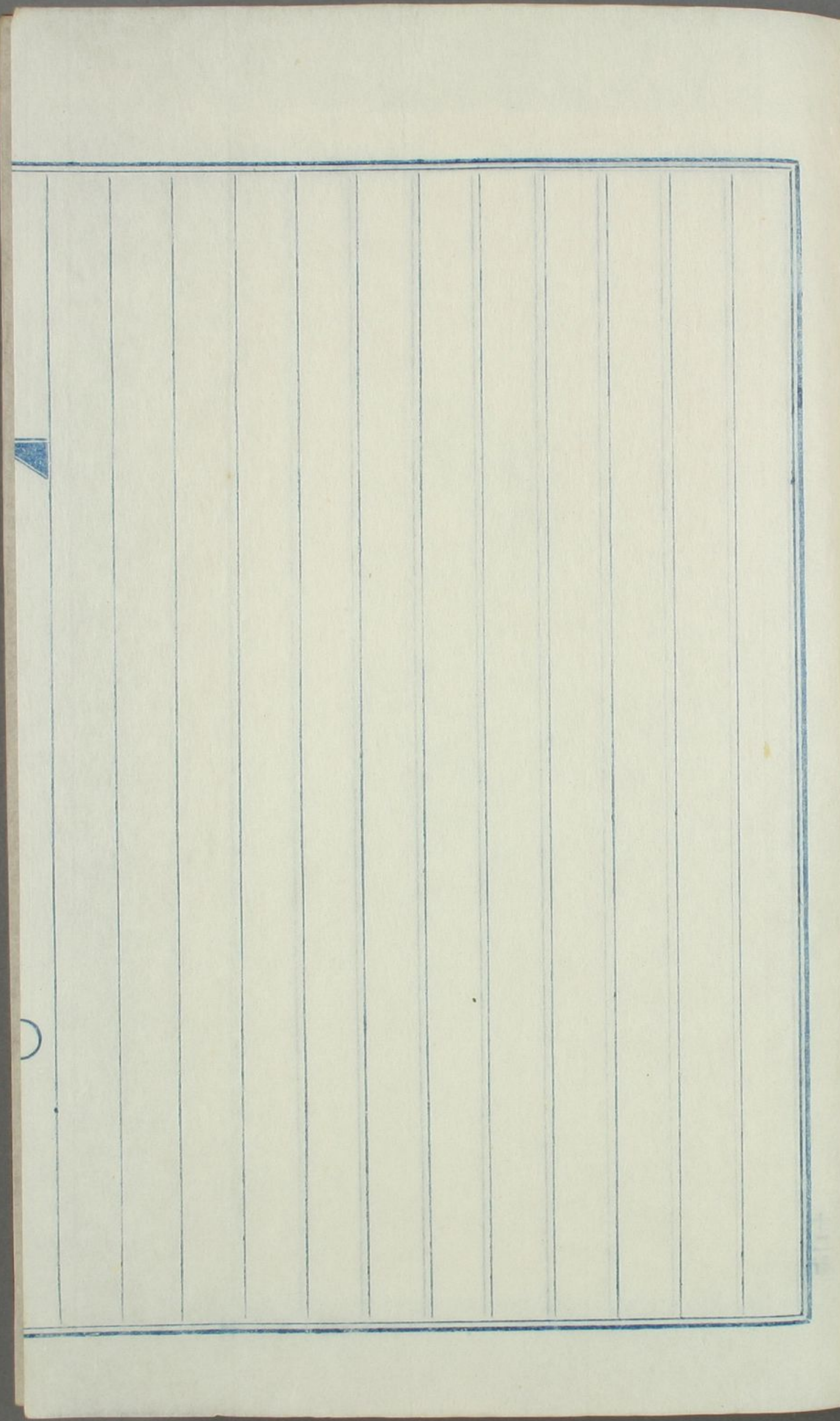




此ことかあるに、彼等、此之新法をを、近間を、使用  
すること、も、あ、げ、果、し、何、と、い、ら、げ、あ、ら、う、か、任、意、の  
何、れ、を、知、ら、ぬ、友、の、連、ハ、早、ク、御、回、の、為、す、と、見、え、し、め、ら  
ず、や、失、神、す、る、と、あ、ら、う

七日、亦、た、の、記





十二行

